特43
87

091392-000-5

特43-87

操の一節（貞烈美譚）

三品 長三郎／編

M16
DBN-2296

特43
87

貞烈美譚操の一節

目錄

第一回　孤獨の哀別
第二回　壯士の懇情
第三回　孝女の天線
第四回　旅客の横雜
第五回　同胞の奇遇
第六回　中洋の浮沈
第七回　婦烈の書懷
第八回　惡漢僕義の強迫
第九回　義僕の舊聞
第十回　傍路の遺財
第十一回　醉人の狂暴
第十二回　闇夜の擁留
第十三回　不慮の天災
第十四回　丈夫の慚悔
第十五回　秋夜の長恨
第十六回　野路の村雨
第十七回　辻堂の邂逅
第十八回　往事の閑談
第十九回　決死の眞情
第廿回　寃罪の鞭撻
第廿一回　不義の榮利
第廿二回　疑獄の落着
第廿三回　善人の發達

（目錄畢）

操の一節序言

常盤かきわに色替へぬ。松の操と。吳竹のよゝよ。榮ふる。節こめし。貞烈美譚を。四方ゝ薫る。芳譚雜誌へ。書續て。學びの窓に。よるの伽。文の林に。聚れ遊ぶ。童蒙方の。徒然を。慰めんとて。物せしに。名におふ。美事を。愛善社の。看客諸君の。佳評を蒙り。這も亦一部の冊子にして。と。望ませ給ふ。尊意ゝ任せ。綴りし作者の水莖ゝ。いと淺はかに有べけれど。深き愛顧の惠に依り。盛り久しき。松と竹。其色香にも。彌倍して。繁き江湖の御購覽を伏而請ふ

三品蘭溪誌

末孟夏

貞烈美譚　操の一節

○第一回

幾闌の芬馨も秋風之を破り喬松の繁茂も氷雪之を苦むると實なるかな世の中にうきふし茂き呉竹の其色かへで翠ある貞操節義の人々が往々薄命に陷るを哀む神ゝ無きものかとゝ思へども夢の世ゝあだにも咲る朝顔の花にさきだち露よりも脆きゝ人の命にて惜きゝ死後の名にしふふ月日と共に朽腐時あき美事善行にぞありけるあり爰に山口縣下周防の國山手町に元ゝ由所ある弓取の果とも見えて何處やらゑ殘る行義ゝ高尚も昔し去のぶの草廬のうち幽かに消光す親子の者ゝ世ゑ定めたる經營も無況其上に主人と覺き人の病氣娘ゝ朝夕暇あく看護あがらも織續ぐ其麻衣の麻糸より細き烟も立かねて親子が露の命だに繋ぎ迭の憂事と慰められつ慰めつ仮初あがら二年ゑあまる貧苦の其中を娘ゝ些少も憂とせず長の年月梓弓張つめし氣の一筋に孝養怠らざりけれども父の病氣ゝ日に增して尽す誠の念力も屆のぬ醫療加持祈禱神ゑ佛に願言を懸しも絶て其甲斐ゝ泣音血を吐く五月雨の空に不如歸と一聲を殘して今ぞあまさがる鄙の烟りと果敢なくも消て行ゑし其頃ゝ明治も僅か二年の皐月の空にてありにける恁て娘のお清ゝ未だ其年も十三に足らぬ活斗を苦ゑもせず親ゝと惜と斯迄ゐ尽し事も情あや獨り憂世に捨られて繋がぬ舟の楫を絶ねよるべ無き身となりければ哽咽伏轉て聲も惜まず泣涕しが漸々人に奬勵れ野邊の送りも濟し後身の落付も泣音より外に術なき孤獨を隣家らの森源吾と呼ぶ人が深くも哀れみ我家に引取て懇ろに介抱しつゝ春秋と送る月日に委みあくお清ゝ早くも二八の春を今年越路の雪よりも清き姿に愈まして心操さへ人並ゑ優れて優美き性あれゞ年頃主人が養育の其高恩を深くも感じ我身を卑下し下婢同樣ゑ水仕の業も厭ひあく眞實を尽して仕へ々れゞ源吾も亦不便を加へ我子の如く愛ける偖此源吾ゝ元長州萩の藩士ありしが安政二年の頃かとゑ早くも時勢の變遷を見限り顯達を當路に願ゝずと該地に來りて農ゑ歸し田畑を求免人と備ひて之を耕作せ貧しからす

其日を消光る身の何不足とていあらざれど妻い往年世を逝つて長男の源之助を忘れ記念に殘しが其後人の周旋に依り後妻と迎へしに是にも一人の男子を分娩たりしが故ありて前年離別せし時二男とさへ母に添て其實家ある長州萩の某氏方へ遣したるより絶て便りも無かりゝる恁て長男源之助い父が手しほに人とあり年いお清に二ッ三ッ況して萬事に慢緩あき怜悧の質にてあるものからいと夙くより學びの道に志傾し螢を聚る夏の夜も雪を圍ぬる冬の日も睡

を破り飢を忍び曾是親の爲とのみ思ふてせざる事あけれバ已に和漢の籍どもを大方ならず學び得て世お頼母しき壯士ありしが斯る秀才の生質にも免れ難きい煩惱の色香妙あるお清の玉容に何時か思ひを懸まくも賢こき心を獨り惱ます樣あれど偵お夫とも言ひ兼ゝん仇に月日を送りつゝ物思ふ身い專猶悲しき秋とありし頃より不計氣鬱の病ひに罹りしかバ父い素より誰彼も看病等閑あらねども兎角不勝の容子お て獨り臥房に籠居つゝ嘆息のみして居る所へお清い盆に藥を乘せ靜かお部屋へ入來り兩手を著て嫺雅に「檀那樣い先刻よりお醫者の許へお出にて此藥と只今しがた先へ小助に持せてお歸しあされ例のとい少し配劑も違ひますれば早く貴君に上げるやうとの傳言托ゆゑ早速煎じて參じましたが今日い貴君の浮氣分い可否如何に在しますやと叮嚀に問 慰られて源之助いいとゞ焦るゝ胸塞がり何といは間の百合の花さし俯いく居たりしが悸々心をおー鎮め「コレお清どの斯く言いゝ浮たる心と一概ゑ傳身の正ーき質にてい輕蔑れんもさることおから此年頃健氣ある其方の舉動といと慕しく思ひ初しが心の迷ひ苟且

あがら病を臥す迄悩む心の誠を察し一夜の枕いかはさずとも行末かけて變らじと只一ト言の言の葉を聞ば此身も惜からじ難面き人と思ふ程猶彌増る煩悩のいと慚愧き我身の錆をかく白地に吐露上からい聞れずとても只やい止ん覺悟い兼て丈夫が命を懸々し思ひ草これ見給へと枕邊に匿せし懐刀把出すいとも切なる戀情にお清い吐嗟と打驚き暫し詞もなかりゝる

○第二回

塵垢い明鏡をくもらせ情慾い良心を害すと眞なるかお森源之助いさしも謹敕ル壯夫なりしが一度迷津の深淵さに沈淪より賢不相無差別の俚諺にもれずお清が妙麗なる姿のそか其心操さへ並あらぬを人傳あらで見聞く毎ゐ忘るゝ隙もあつかしく又戀しさの愈まして只一筋の心より二世の契と神かゝてあふせの無くバ雖をこのもともし火による夏虫の焦れて物を思いんより我れ早死なんと迄悟覺極めつ折もあき折を稍得て幾度か心の情くり返すいとも切なる壯夫の恨みと哀れ外にだもしるや知らずや未通氣のお清い

澄と赧愧し顔を袖もて打蔽ひ言語いなくて立退る裾を楚かと左手に拿へ右手に懐刀紋立て源之助いいと恨め一氣よお清の顔と打眺り「百夜の情深草の尽す眞實ゐ及いずともをしかの角のつかのまも忘却れ兼たる心から斯日蔭の花とまで凋むばかりの病著に身のなる果とあいれとも思いゝよしや一夜の倶寐の夢い結バずも行末かけて變らじの曾葉の誓ひい難きにもあらまじものを只管ゐ強顔のみが人の實情の开い兎も角もあれ叶いぬ時い躁てより魔悟突発し事あれバ病痩ふてあま中に人ゐ疎れ果んより責てい傷身の目前にて我偽り無き赤き心を示さんと思ひ切つて扳放つ白刃と吐嗟我と我が腹へ刺んず容貌にお清い驚き縁縋り暫しと擁留る手を振拂ひ「強面からバ只一筋に强面からで春の氷の薄情とけもえやらぬ人の心にいつ迄ものを思はせられん其所放してよと又把直し閃めかす刃ゐ眉もあゐ竹の雪に悩める風情あるお清い右左ゐ懐刀の柄を楚かと取止めて「數ならぬ身の花もあきとさばかりに思召し下さる傷心露疎略にい存じませねど忠と孝とにかへ難き心の中の切なさを一通り陳述るそれまでい先この刀

い此方へと無理に奪取り側へに置き前掻合せ行義正しく手を仕へ「愚鈍ぬ女子の心にて怜悧き殿様へ端た無くば異見とにいば座りませぬどお情厚きお心を背く我身の苦さ胸とお聞なされて下さりませ所も卑妾の父い元浅野家の藩中にて世にある頃い人並み弓矢とる身の數ありしが浮世の態の變遷につけかたふく運の悲さい重なる不孝に親と子が定先無き身のたゝ住ゐ此土地へ流涙來しより父が長の病著き羅りし折い卑妾も未だ十三の幼氣に何と詮方泣者より外に便も無き親子を憫然と思し擅那様が醫藥の料うら烟の代まで並々あらぬお心注け受し恵みい

いや高き其恩恵を送りも果ず父が墓あくありまず時み卑妾を近く招き我亡跡いさこそ便あく思ふらん去あがらお慈愛深き森様のお影をもつて人とあらゞ行末とも み其方が身と決して惡ふいあされまじ付てい其方も森様と恩主人とも亦親とも見て心の限り眞實を尽し大切に能く仕へよ別て女子い慎みが肝要あれゞ假初にも浮たる事みい心を染むな親い果敢無く埋れ木と花もえ咲で朽果るも其方い必ず身を慎み人に笑れれ名を汚さず家をも氏をも興して呉れいふべき事い是迄ありと聞まし時の悲哀さい骨身に染みて此年頃父の遺訓を夢の間も忘れ玄ものと

身を責て尽せし甲斐も情あや恩と義理との柵みに斯る貴郎のお言葉を背くゝ親と汚主人へ立る我身の忠と孝斯迄切なき心の中を些少ゝお察し下されて浮きたる事ゝ思ひ絶ねば身を愛して一日も早くば本復こそ願ゝしけれ斯ゆてもお聞濟み無く見影もあき身妾と猶も思ひ絶じとあらば今ゝ恩あるば主人へ仇となるべき我身ゆゑての懷刀ゆて潔よく死して心の實情を顯し亡後までも不義いたづらと人の批評ゝ受けまじといひとくいと口淀み無く清きゝ知らるゝ節婦の言辭を聞く源之助ゝ心に愧てや頭を底て暫時默然たる折しも隔の襖押開けて主人源吉ゝ聲高らかに「高砂や此浦ふねに帆をあけで」と謠ひ謳ふて立出づるを見るより聽て源之助ゝ容貌を改め父が前に兩手と着けゞお清ゝ偵主人の心を配か孫只平伏てゞ居たりける

○第三回

當下源吾ゝお清に向つて言ひけるやう今に始めぬ事あがらかゝる可しとゝ此年頃思ひしに彌ます其方の心底命に換て義を守るいとも健氣き節操ゝ世に又比類少あかるこれゞ烈女の鑑とも言ふべき處女を筒井筒ふり分髪の其頃より手しほにかゝて養育さる我身の面目生前の喜悅これゆ倍ものおしと滿面笑と含みつゝ又源之助にうち向ひ青柳の糸末ながく結ぶて ふ緑色濃き妹と脊の緑と爰ゆ承諾ひて父の心を安堵めゆゞ豫ての情願を発しなん斯てもお清と婚姻の義と否ひにや如何にゞと問かけられし主よりもお清ゝ主人が意表の辞ゆ何とゆるこへよる雀の羽風ゆ騒ぐ心地して胸安からず居たりける時ゆ源之助ゝ漸くに底げし頭を擡げつゝ仰くも高き親の恩深き高情ゝ身ゆまる感涙を袖ゆとゝめかね「慮らざりける親人が御出とゝ露知らず猥褻ゝーき此場の体裁面目も無き仕合と言へゞ源吾ゝ打笑ひ爾より親が慫慂を固く辞退みて今此仕義子細無くてゝ叶ふまじ包まず樣子を物語れと言れて少しく面を起し然らば一通り申上ん「父在せば遠く遊ゞずと聖の籍にありとゝ言へ名と揚げ家を興すこそ眞實の孝と豫てより貴父の教訓を聞ゆつけても當今の世ゝ現に千載の一遇とか斯る得難き時を得ゆがら徒らに蝸廬に朽果なんゝ只是親への不孝のゑか世に丈夫たらん者の死しての名折れ生ての恥

辱と思ひ究しい早二秋も以前の頃より只管茲ゑ心志し朝夕撓まず勵精にし學びの道い浅くとも深き我身の志願をバ往日貴父へ願ひたれども中々にお聞入れある可き樣もあらざれバ忽地失望いたせしより樂しからざる行末と思へば專猶氣も結鬱れ解よしも無き心の憂悶に所詮恁て止なんより一時不孝の罪重くとも竊に家出あしゝ後百折千磨の難苦を經て豫ての志願を果せし時こそ今の不孝を償ふに足りあんものと既ふ心志を確定れバ此頃病氣に仮托て機會を見合せ居し内に慮らざりき父上より ふ清を嫁娶す仰を蒙り是非ふとあれど壯客が心志を定め鄉關を出で行方い未白雲の果し無き身の修業の首途ゑ妻と娶りて何にかせんと思ひにゝれバ夫とは無く爨にい固く辭みしありとは冒へ我身が出行く跡にて朝夕父へ孝養を尽すべき者あらじと思へバ是のを胸苦しく存せしに幸ひお清が人と成り温順柔和の性あれバ彼ふ委細を打明て父上の事依托ゑ如ずと早くも心に思慮せしが彼も女子の事ゑしあれバ永の年月經るうちゑ心の變る事もやと聊か掛念ふ存せしより先試みバやと恁く不義徒らと言ひかけて剩さへ刃を以て强迫しも節義ゑ動かぬ彼が意中尋引の石い轉ばすとも轉ばし難き賢婦の心に愈々愧つ歓喜て依托の一條ヤ陳んとせし折から慮らずも貴父のお耳に這入しい今更あがら慚愧の至りとバかりにてい未だ身の非を飾るに似て影獲き限りあるとも我身ゑ不義と存せぬ憑據い志願と遂ぐる其時迄妻いさて措き苟旦の契りも固く結バじと誓ひを立し心の潔白父、の仰も是のをい背くも癒て身を立て目出度歸鄉の其折迄婚姻の義い免容し下さる可し又お清ことい今より同胞の緣を結べバ行末ともに父上へ孝養偏に頼み入ると初て明す壯士がいと健氣ある精神を聞ふお清い欣喜しくも又愧かしさの胸に滿ち暫時い顔も擡げざりしが漸々にして言ひけるやう海の親より猶高き此年頃のお惠みは身を粉に碎きて盡しても足らぬ女子の愚かある心と憫然と思召され斯迄厚きお言葉い冥加の程も恐ろしけれバ只何時までも此儘に下婢と同じくお使ひあされて下さりませと思ふ事言はで言葉の寡きも誠い一句に籠るある両人劣らぬ烈婦と壯士に源吾い專悅びのやらん方あき親心暫し感賞して居たりしが「ヤヨ両人親はづかしき其志操を聞ふつけても只婚

姻の義を承引ぬゝ心得がたし知ずや君子ゝ樂んで淫せずとの敎あるを夫のゝあらず源之助ゝ望ゐ因りて丈夫が四方に馳る心志と只今允す上からゝ親を孝養ふ其爲に妻を娶るゝ當然ゐり辞するゝ要あきことにこそと道理責し父の慈言に今ゝ推讓も容許されじと漸々思ひかへしつゝ否ぶねのいなにゝあらぬ妹と脊が緣しを爰ゐ諾せしかゞ源吾ゝ只管欣喜びて是より貢道吉日を撰を癒て目出度婚禮の義式を整へ八千代をこめし玉椿かゝらぬ色と祝しけり恁て後源之助ゝ望みの通り父より許諾を得て遍く諸國へ遊歷せんとその用意も已に整ひ出立の日に及びける

○第四回

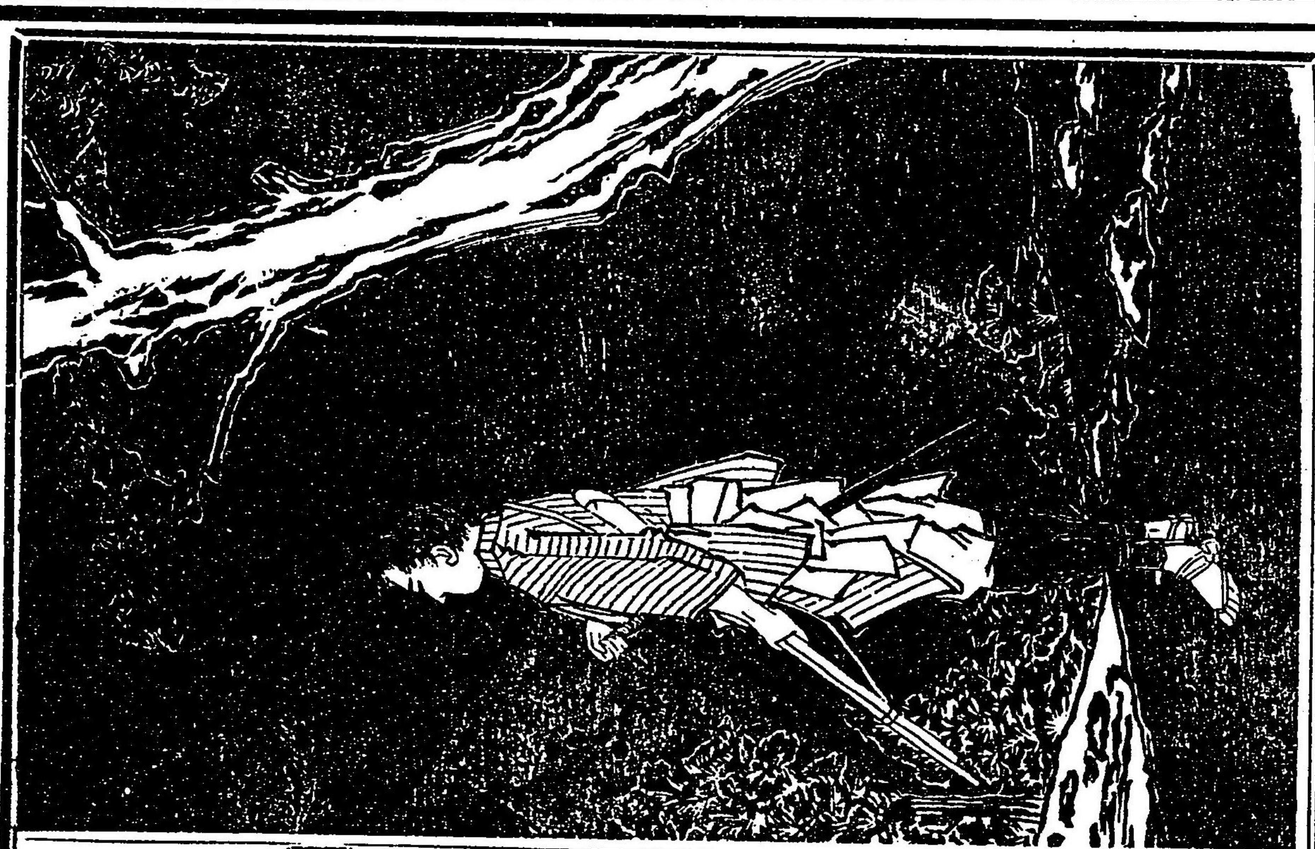
逢見ての後の心にくらぶれゞ昔ゝものを思ゝざりけりと實やお淸ゝ圖らずも主人が慈愛の辭に因り遂に源之助と婚姻と結びもあへぬ手枕に我から允す下紐の解けて逢ふせゝ只一夜妹婿の契り淺茅生の峯上距つる別路ゝ今日と限りと旅の空歸る日とても定めあき本意あい良人の首途を偵がに名殘惜まれて彌倍も思ひ身一ッに斯る嘆きも憚りの闘の戸たてゝ忍び音よ唧や袖の露深き泣顏人に見られじと背後にありゞ一ト言の別を告る言辞さへ中半ゝ胸に逼促來て言ゝぬも言ふゐ大丈夫が身ゝ木石ゐあらざれゞ同じ思ひよ打凋るゝを我と勵まし癒て旅行の支度を調整へ父を始め人々よ身の暇を陳べ終り世とふる鄕の軒を出て雲井に遊ぶ大鵬の萬里に翼を駱も時と得ざれゞ旅から旅に野ざらしの屍ゝ獸を肥そとも再び我家よ歸らじと豫て思へゞ梓弓張究し氣の一筋に二世の契りをふり捨つ限りもいざや白雲の未遙かなる草枕袖のすゝかけ露霜をけふ分そめて立出る人の心ぞ勇ましき首途を送る嫁舅門戸に立つゝ延上り見やる那方ゝ未だ明きらぬ呉竹の暖の數ゐ隔てられ最愛き人の後影着る〳〵見えずあるまでも暫し佇立居たりけり却說亦源之助ゝ深き所存も有明の月と伽かしに我屋を立出で爰に日頃の素懷を遂せしも別に子細のある事にて斯迄に心强くも只獨り指して行方ゝ雪水ゐ定めあき身の旅枕是首よ彼首とさすらひて世に名ある人の門下を訪ふ時ゝ我心志す道を切磋し或ゝ各地の形況を索りて今日と暮し明日と過ぎつゝ急がぬ月日も疾く經過て二年あま

りをふる鄕ゝ近き長州萩の城下ゝ素是父が生國にて聊か思由やありけん此邊りへ經歷し頃ゝ明治も八年の秋暮れゝて〻花ゝ根に鳥ゝ古巣に歸るてふいと〻露けき旅衣身に染む風も夕寂てあれます穂の繁芒わかめ〳〵と招くより外ゝ草葉わ叢集く幽けき虫の聲枯し千萱が下より日ゝ暮て振離膳やる彼方にゝ目も遙かなる足曳の山又山に出る月も天曚ある浮雲に結陰てゝ又霽るゝ影も不定の世と思へべ逆旅の哀情腸と斷ち人間の感概最も此境に多しと古人の言けるも宜なるかなと坐ろゝ哀れを催して立も去らず佇立みし處ゝ萩の城下より二里あまり東なる列幹の邊に我にもわらず呻吟して居る折しも月ゝむら立つ雲に隱されて咫尺も分ずあるまゝわ豫て傍側の藪影わ忍びし癖者やありたりけん狙ひ定めし鉄炮の火蓋を欲て動と一聲打出す彈丸ゝ危ふくも源之助の肩を掠て飛散たり不意の狙撃に是ゝとばかり駭く間も無く再び響く炮聲に偖ゝ癖者あり油斷あらずと身を搏へて太き松を小盾わあす程しもわらず雲間洩る月の照光と諸共わ顯れ出たる一個の癖者鉄炮片手に千萱を推分け前後を靜かに打眺めて足提に此方を指しつ歩み來るを源之助ゝ遣過して幾より言語をも言ず癖者の利腕楚と捩上るを忽得た

りと身を反して飛退り矢庭に銃炮取直し撲んと進むを閃りと外し蒐潜つて蹋仆せば横會をうたれて彼癖者い涙踏あがらけし飛ぶ所を起しも立ず乗懸り膝上に組伏せ動かせず怒れる聲と掉立て「ヤチレ草賊族人の不意を狙撃あし命を斷て金錢を掠奪あさんと慘酷にも伎倆る汝の害心い虎狼よも倍し悪む可き天罰爰に思ひ知れと敦圉猛く詈りて落たる銃炮取る手も見せず掉上撲んとする處に怪しむ可し合圖と覺しき笛聲と共に四邊茫然として物騒だち此處の藪かげ彼處の樹間と齊しく出る賊徒の同類各手鉄鉋鎗刀得物〳〵と引提げて騰り出たる異樣の打扮先に進みし一人の壯士と持たる鎗をしごきも面へず只一刺にと勢ひ蒐る後ゑ同じく二人の賊徒が吐嗟小銃の火蓋を切て撃んとする正皓に當たる源之助の一命い現風前の孤燈よりも猶危ふかりける次第あり

○第五回

亦説も那邊此方の樹間より顯出たる癖者の先に進みし以前の壯士い氣勢込んで蒐來る中にも二人い鉄炮の狙ひ堅めて一樣に吐嗟や斯よと見えたりける正皓になつたる源之助い假令へ三面六臂ありとても又詮術いあるまじく只是釜中の魚に異あらぬいとも危殆き折ろあれ忽然として人馬の音喧噪しき程もあらせず疾こと宛ら颯風の如き勢ひ猛ある一隊の官兵群立つ賊徒の中央へ會釋もあく無二無三に撃入たる先に進みし其人い士官と覺しき分装にて馬上あがらよ大音あげ逆賊前原が暴黨ども今こそ罹る天の網一人も洩さずアレ捕獲と持たる洋刀打閃めかし烈しき指揮に少しも躊躇まぬ日頃手練の鎮兵撃つるべ懸たる鉄炮の狙ひい茲に誤たず今早源之助と撃たんとあしたる是彼の賊徒い齊しく彈丸に各々急所と撃貫れ聲をも立てず血烟たつて倒れたり此形況に自餘の暴徒い不意を撃れて色弛さち逃足出して逃るもあれば又引反して撃合ふ者も多かる程よ忽ち修羅の街とあり撲つ撃れつ追つ反しつ叫喚で戰鬪ひける時よ磯山雲ひら立ち再び月い隱されつ空定めあさ秋風の颯と吹起すほどころあれ俄よ降來る雨い彼鞆ケ岡の篠よりも繁くそゝぎて時あらぬ霹靂さへ轟きつ見る目覩き電光の閃ゐ雜る彈丸炮火いと怖ろしき容形に敵も味方も暫しのうちい進もやらず逡巡ひゐる此折までも源之



助い立ち之去らで組伏たる賊をそがまゝにして在けるが佶と心に思ふやう先刻不慮の暴徒等ゐ遮留られ己に一命も危ふかりけるを不思議ゐ死地と遁れしも恁て何時迄か此邊ゑ躊躇せゞ再び斯る急危に命と落さんも亦慮りがたし兎にも角にも一先爰を立退きて様子と捜るに如ことおしと思ひ定めて身を起ざまゐ彼組引たる賊を殺も無益と力に任し距離遙かに蹋飛しく奪採たる鉄炮を小擁に狭み傍らの列幹へしのぶも便りよき雨風の烈しけまゝゐ咫尺も分たぬ闇ゐまぎれて幾町か道も擇ず山路を指して行く後を敵か味方の一人の癖者竊かに附つ窺ひ寄り呼吸を揺ッて只一打と闇ゑも光る白刃を背後に匿し附來るとい神あらぬ身の爭か知らん源之助い次第に炮聲の遠離るゐ少し心を安んじて一息吻んとする折しも雨い漸やく小降になり其夜も已に更闌りけん松ふく風の物寒く張り落る溪川の音すさまじさ深山路ゐ闇いあやなく進みかね暫し佇立む後より時分いよしと聲をも掛ず呼吸を便りに斫付る鋭き刃の雷光と早くも目認て源之助い飛退きさまに持たる銃砲取直し刃の光と応當ゑ撲挫がんと掉拂へゞ彼方も隙さぎ付入る尖き思いず覆石と打合する一上一下虚々實々互ひに燥急て撲込めども闇さい暗く道の泥濘に進退殆んと自由ならねゞ一ッ所をいく度かもきてい飯りかへりてい又行雲の旗手より折から落す山風ゐ吹散されて雲間洩る澄月影ゐ慮らずも双方齊しく顔見合せて彼賊い驚きあがら聲ふり立て「闇ゑ紛れて狙來り只一撃と思ひきる我指す敵い捕手の中ゑ今有名の士官あるを似ても肖つかぬ汝が行装敵か味方か怪しき旅人其名と告れ疾く聞かんと勢ひ猛く詰寄れゞ源之助い冷笑ひ「彼蟷螂が斧をもて隆車に向ふと一様ゐる烏合過激の草賊等が時勢と知らぬ粗暴の擧動ひ汝等如きゐ我名を名告も無益ゐれど望みとあらゞ言聞さん元當藩に其人ありと世ゐ知られし遊撃隊の源吾が一子森源之助とい我事なり仇か遺恨か但しい盜竊視察ゐるか斯迄執念く旅人ゑ碍する草賊道ぐとて爭か逃さんや覺悟あせそと言ふより早く撲懸ゐを彼方い急ゑ身を反し懸き忙て持たる刀擲棄つ這い慮らざりける我兄上暫らくお待ち下さきと詞急しく推止られシテ我を兄と呼ぶ汝が出所姓名いと油斷を見せず問懸けさり

○第六回

磧礫を斷すんで玉淵を窺はざる者い未だ驪龍の蟠まる所を知らず弊邑ゐ慣て上邦と視ざる者い未だ英雄け纏る所と知らずと言へる吳都の賦よ習ひてか彼源之助い一朝心志を立しより笈を負ひ草鞋を穿ち雨ゐ沐し風ゐ梳づらせ多くの艱難を經る中今日しも非常の急厄に再度まで遇ひて慮らずも嬰兒時に別れたる腹い異へと血を分し弟に名乘懸られて思はず悸然胸おし鎮め其來歷を委細く問つゝ先傍に年古る松樹の根に腰うち掛れゞ彼も間近く進寄り偖いひけるやう小生い今の名を飯田政二と中し母と共ゐ當地ゐる僅の知己に身を賴て幾年月か爲こども無く消光しうち本年如月の中旬母い病ひにふし柴の朝の炊ぎ待ずして果敢あく烟とありける折り初めて明せし我身の素性實の父い當藩にて森源吾と呼ばれし人あるよし又母が離別にありし事がらい往時父上が參勤の留守中とかに如何ある惡广や魅入けん世になるまじき身の不品行我つまあらでさよ衣褄重ねせし浮名い洩れて其噂高かるより遂に情夫と諸侶に家出あしたる頃い未だ嬰孩

き我身あれゞ偵に捨も置きかねつ携へ出て那方此方と伶魄うちに因果い覿面顧みと思ひし人よい捨られ忽ち歸るに所あき身の非を初めて悔悟せし母い古鄕ある當所の知己を僅に賴りて此年頃親子か露の玉の緒と繫も果ぬ今際の懺悔折を見合せ父上ゐ環會し其上にて母が身の非を詫してよ又其方にい異腹の兄あり行末ともに力にあれ言置事い是のみなりど過失て改先たる慈母の遺言と仇にいせじと思ひ思いず當年い靜謐あらぬ該地の樣子に聊か他國と憚りて今日迄默止し折柄前原一誠等が大義を唱え兵を興そに小生も日頃明道館の諸生あれゞ遂に此擧に預りて天晴功名手柄をあし亡母の汚名と今ぞ雪んと豫て心に樂み居しに今朝小倉分營より追討の官軍向ふよし己に此方へ聞えたをゞ各自所々へ立忍び不意を襲ふて彼等の强膽挫しがんと待設々たる其處へ斥候と覺しき一箇の旅人那方彼處を窺ふ樣子に碩癖者よ遲すあと各自一齊取圍みたる折しも不意に官軍の襲擊甚だ烈しきものから味方い忽ち騷ぎ立ち遁退殆と難義なりしも幸ひ遽の風雨に紛れて大方い疾く引上しが小生い元來此一擧に拔群の功を立んと豫て心に定

然し事ゆゑ能き獻もがあと聞に紛れて只一人附來り狙撃んとせし人い敵にいあらで思ひきや兄上汚身でお在しか知らぬ事とい言ひながら重ね〳〵し麁忽の舉動ひ今更ながら謝するに辭も無き次第面目あさよと打詫つゝ委細に語る今宵の形跡を聞終りて源之助い辭を和らげ「別後久しき兄弟が慮らず爰に環會し欣び何か之に過んさるあても痛ましきい繼母なり營へ身に越度ありとい言へ我も幼少其頃い朝夕摩頭の愛を蒙り假初あがら親子とまで名乘しものを夢にだに其死も知らず剰さへ毫恩義を送りも遣らで永兄別れとありし事哀傷心腸と斷バかりまして小生が這回當所へ來りしい外あがら母上の安否を索んず志ありしも今い他ようなりけるの思へバ果敢あき夢の世にまかせぬものい哀別の終の友にてありけるありと道理に曉き壯夫も偵に迫る恩愛の誠い面に顯れていとい哀れを催しけるが佶と心を取直し政二に向ひ辭を正して復び言ふやう察するに今度前原等が兵と舉るい皆是私憤と洩さんとて無名の暴擧をあすあれバ其危ふき事卵もて石を打が如く又彼精衛といふ鳥が木石を銜て大海を埋んとし遂ふ溺れ死そより

も猶愚なる所行あるに其方い何の見る所ありて彼賊徒等にい與せしか恐らくい是只血氣に逸りし失錯あらん早く忠と改め防州なる父が住居に趣きて母の遺托を果し父上へ孝養を盡しなゞ責てい亡人の罪を償ひて今世那世の親々へ孝道實に全からん若これをしも否みなゞ其身の破滅を取るのみか不孝の汚名い免れまじ如何にやいかにと説諭す辞に愈政二い恥入り暫し默止て居たりしが思ひ直して僅に應諾し折しもあれ再び聞ゆる砲聲のいとゝ間近く轟く間も無く勝誇つたる兵卒蠻い賊と索捜て今早此處へ寄來るにぞ源之助い佶と見て「兄弟一所に落行んい猷へ目立て必ず危ふし我い是より猶西の國へ遊歴せん其方い今も述如く疾々父が許に至り我に換りて孝養を偏に頼むと言ひも終らぬ其所へ雞々と寄來る官軍の隙を窺ひ二人い倡に立上り互ひに目顔で暇を告げ西と東へ別れ〳〵に落行ける

○第七回

離合時にあり窮達も亦命とい雖ど其不定なる事逆の期すべからず逢ふてい別れ別れてい遭ふ現風雲のさいすまひ一紳一縮前諾後信料り難きい世の間にあべて離合と窮達なり然れゞ森源之助い慮らず弟政次に環會ひ是彼ともに意中を尽す間もならせず再度の危急に本意あく快を別し後い往々て肥前國茂木浦より船路を求め忍指す隼人の薩摩潟へ渡らんと來りし頃い九月も稍果て秋塞げある夕まぐれ嵐こがらしむら時雨霽分かねしあし曳の山又山い高く東北に連り樹々の枯葉まだ染ねども斜陽に彩る遠景覩く向上れゞ幾群の秋鳥雲に入て還らず直下せゞ海水渺漫として白波天と共に高く見るに就き思ふにより皆是旅泊斷腸の媒酌ならずと言ふものあし時に此浦より解纜の船ありけれゞ源之助い聽て之よ乗組し間も無く順風よ帆を揚て只管西を指して走りける程よ其夜も已に更闌て月い波上に浮び看るく斗牛の間を徘徊あし白露い江に横いつて氷光天ふ接する好景佳境彼蘇氏が赤壁の遊も斯やとばかり言ん方なく各々暫らく船中の憂悶をぞ散じけるが實に定め難きい秋の空變る西北の風颯と吹下す程しもあらず一點の暴雲光月を蔽ふよと見る間に海面忽ち晦み渡りよせてい碎け碎けてい又立返る荒溟の

いと凄寥くあるまゝゐ船中の人々驚き叫び元の汀へ漕せ戻せと急噪ど次第に風の吹暴に順ひ小山に齊き激浪狂瀾渦巻きたつて船を包み打揚る時い天へも登る心地せられ又打下す拆い萬仞の青壁より轉落る思ひ殆り不動の源之助い此時迄も自如としてありなるが今打寄る荒波の機會に船い暗礁に衝突り瞬時ひまに米塵と成ッて影も之留ず砕けしかバ夥多の乗組船子楫取も逆渦浪に雪たかたのわれれ果敢あく海底ゐ生死も知るずありにけり話分兩頭る却説く源之助の妻お清い二世の契りを結びし間もあく本意あい

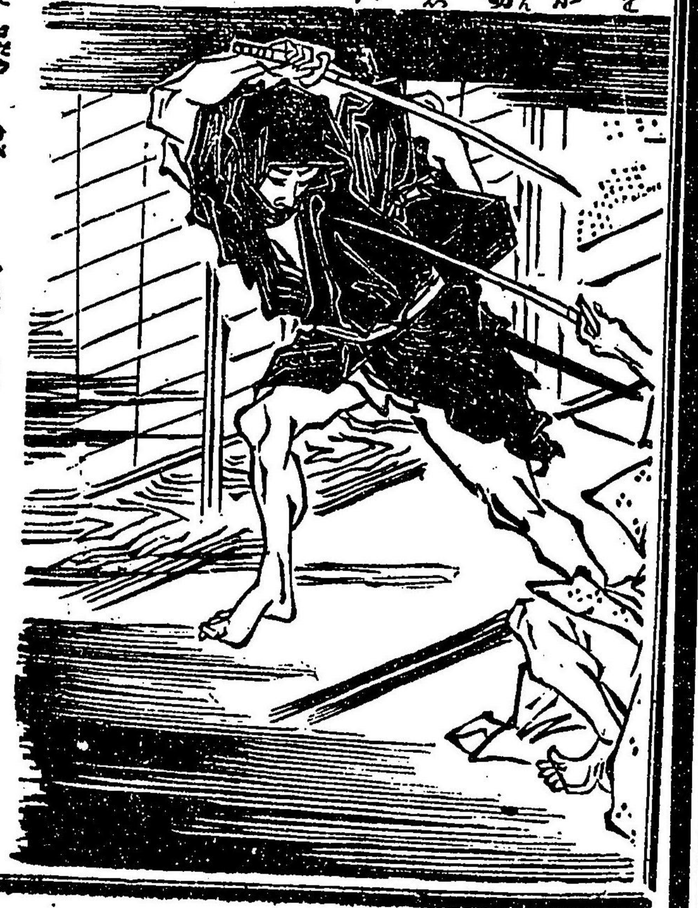
夫の首途に惜む名殘い今一度いかで言葉をかい島のよるべの崖に離たれて逢ふ日といつと期し難き長き別れとなりしより此頃い雁の翼も絶果て音耗聞ゑぬ年月を只眷戀て嵬す中ゐも眞へ尽す孝養慈愛露疎潤いなかりけるがまだ一年も經ぬ春の頃より源吾い心地例あらずとて打臥しまゝ枕も之上ず世に中風とかいふ病ひにて日ゐ〳〵弱るばかりあれバお清いいとい悲しさのやる方も無き思ひして鍼灸藥餌に手と尽せど其驗さへあるよみの甲斐ころなけれ女子の手一ッ心細さに堪かねて人目を忍び泣腫す二重瞼に八重雲のかゝる憂い世の間ゐ儚罕なる孝貞節

婦返らぬ人を幾度か思ひつゝけて形あさ身の久後を定ぬ兼たる今日と暮あすと明して今茲もいとゝ物悲しき秋の最中とありけるが或日お清い小夜ふけてまだ寐もやらず獨り熟々と見れば思へば我夫のむごき心と葛の葉のうらみよ因て猶迷ふ旅宿あがらの鳥の跡今い何國にお在すらん是おくべ忘るゝ際もあるべきにと過し便の玉翰とうち開き又繰返す涙の滝のいとせめて哀と知るや庭の面に遠近集く虫の音も共に憂とぞ喞ちける折から扉外よ怪しき癖者垣の間際よ身を寄て内の樣子を窺ひつゝ忍び入らんず有樣よ忽ち虫の音い止みて白晝の如く照る月も暫らく雲に躲れけり

○第八回

却説も籬の邊りに身を倚せし彼癖者い折ころよしと矢庭に内へ忍び入りお清が獨り呟ち居る傍へ衝と近付まゝよ氷の如き白刃と拔て疊へ具嗟とつき立つゝ聲をひそめて「コレ女子何も驚愕く事いねへ今宵當家へ忍び入たい豫て世間の評判よ充分金の有る事を聞て盜みに來た賊ゆゑ疾々金と出せばよし惡く聲でも立さあら古ひ文句ふ有る通り大事お一命と行別れ夫が否あら遲滯せずに貯藏し所へ案内しろと大膽不敵の強賊が白刃片手に取直し目先ゐ突付々威嚇かゝればお清いはつと驚きしが遁れぬ所と心を居へ「御覽の通り何一ッ貯藏へ溜さ士族の果て殊に夫い過し年他國いたした其後い便りも絶て無き中に身御が永の病氣藥の價や何やかに今日の烟も立兼ぬる貧しい家よ何として金子の貯へあるべきやい疑ひ晴して許し給へと打託るを能も え聞ず冷笑ひ「夫お愚お官解を聞かうが爲に大切ナ命と資本よ荒稼ぎ強盜おんどをするものか無と言ふおら家搜して自身に持て行程に故障げすおと言ふより早く其處等隈おく搔索り目よ注く筥笥の鎖鑰碾と捻切て中より取出す手文庫を小脇に狹み立上るを夫遣ていとお清い縋り取戻さんと爭ふ手先を楚と押「見れば視る程美麗しい和女の容貌と此儘に只見過して行んい本意おし一樹一河も緣とやら否應言いずに是コウト綢繆かゝるを突退けて其事ばかりい許してと聲を限りに叫びつゝ那方此方へ身を反し遁れんものと焦急ども微弱き女子の力にい何と詮方泣聲立て救を求むる聲たてさせじと手早く懸る猿轡狩場の野

鶏に異あらねど身を汚されじと節婦の一心押つもだえつ爭ふを面倒ありと有合ふ細紐取るより早く縛り上げ吐嗟斯よと見えたる折しも一間を隔て舅源吾い最前よりの有様に切歯をあして焦慮ども身躰不隨の難病あれバ防碍もあらず只管に胸を切裂く思をあして伺ひ居たれど今い少しも猶豫ならじと偵い武士のあれの果て昔しとつたる白柄の一刀引寄せ病床を漸々よ這出て賊の後へ蹶り寄り扳手も見せず斫付るを彼方い目早く身を反し能も見遣す左足を揚て碓と蹴仆し聲ふり立て「足腰働ぬ老耄奴が身の程知らぬ刀物三昧我快樂の防碍する上い只一刀に此世の暇とらして臭んと閃光を鋭き刀よお清い繋き蒐寄りつゝ舅よ遇傷あらせじと縛られながら身を捐に那邊彼方と立塞り刀物を懼れず遮ぎるを防碍なせそと突退けて賊が打込む尖先に源吾い肩先切裂れ素より疲勞の病人ゆゑ何かい以て堪るべき吁とバかりに反倒たり



○第九回

去る程に賊い源吾を砌倒し距離遙ゐ蹴返して顧看も遣すお清を引寄せ挑み翻れど眼前に舅と殺せし仇讐に爭か肌身を汚されん微弱き女の一念も凝てい偵大丈夫に劣らぬ心の貞操節義怒れる目尻血を濺ぎ長の黒髪逆上て凄寒じき容体い豫て必死と期した

りけん今い少しも動ずる色なく兎角して喰されし猿轡を噛斷り吐息吻々賊を見て言葉鋭どく怨ずるやう殺さゞ殺せ不義奸賊の白刃に命い捨るとも世に炎陽の息ある内い恨み重る極悪人の忌いしき言葉さへ聞もうたてし汚いし只是のみあらずして恩義も高き舅御を傍看邪慳の鋭尖に殺されし恨の程九ッの代を換るともやいか忘るゝ期あらんやさるにても名殘惜さい我夫あり一度親に許されて妹背の契りあり磯海の深さ歎きに此年頃戀慕ひし甲斐もあさ名を留め化野の朝の露と消あんを知らせねばこそ夢にも知らで在すらめ思へゞ果敢あさこのりの世に假の玉の緒絶あゞ絶よいつ迄か斯る憂目に苦酷られて形あさ身を存命へ疾々殺せ砍ずやと咄つ言葉も雄々しく命を惜まぬ烈婦の覺悟健氣にも亦潔よさ姿の花も夜嵐に吹散されし風情にて雨ゐ惱ゆる海棠の花もの言ふよ異らぬいと麗艶さ美人の愁容露か乗か潛々と膝に落せし紅涙悲泣實情い責て哀れあれども情を知らぬ彼賊い始終と聞果て欠伸しつ冷笑ひ面白からぬ長談義所謂を聽ゞ有難からぬ愚痴妄想人の爲よい貞女でも亦賢女でも自已よ取てい强面い幻妻嘆ゞとて叫ゞとて一段懸つた毒蛇の口氣を遊るゝ事いはつてもねへ眷戀れたのが其方の因果と諦めて願に心に從ふか但し最些と悲哀い憂苦を視せうのと吐ゐはざく罵詈廣言飽迄悪さ凶賊の邊を窺ひお清い縛められし紐を漸やく引斷り手早く源吾が落せし一刀を取と齊しく舅の敵と斫懸る女あがらも鋭さ尖さ恨のねた乃侮り難く見えけれゞ小癪る奴と打合せ二刀三刀切結ぶ賊が手練の刀風に忽ち刃物を卷落され是いと跟浪ぐお清の髻を矢庭に摑で彼賊い膝下に引居え怒れる聲立て憎さ女奴心よ悖るのみあらず手敵を爲からい如何ゐ優い乃公でも最了簡いトント成ぬ是から夜長の慰に存分儘にしよ上で弄斬よして遣るゝらふ望通り舅と共よ地獄でも極樂でも勝手ゐ方へ往生しろと匂りあへず手よ線みし丈の黑髮引絞り那方此方へ突廻す殘忍非道の形況い目も當られぬ折しも表へ立戻る此家の義僕畑野小助い今朝近鄕まで趣きて慮らず道よ日を暮せど豫て聞えし主思ひ留主の事とも案じつゝ夜更も厭いず息喘と歸來りし戸口に並々ならぬ物音を聞と齊しく胸先騒ぎ我ゐもわらで滅離々々と雨戸蹴破り騰り入り斯と見るより拔手も見せず

強賊の眞向未座と斫懸る不意の救ひに驚きし賊も狡者身を退りお清と片傍へ突退るが
ら打合したる上段下段拂へゞ退き引ゞ入り來往去回の秘術を盡し双方劣らぬ蝸牛の角
閃めく劔ゝ雲の雷光受つ流しつ暫時が程ゝ鬪爭しが忠義に凝たる小助の鋭き刀風に忽
ち賊ゝ砍立られ叫ゝじとや思ひけん閃りと庭へ飛降つ猿の如く高塀へ登ると見る間に
外の方へ早騰越え跡白浪と
退行を遁ゝせじと小助ゝ賊
を追行く後にお清ゝ夢見し
心地して已に必死と覺悟を
あし舌嚙切て死せんとせし
も不思義ゝ小助の救ひを得
て身を汚されぬ死を遁れし
其喜びに引換て見るも悲し

く痛ましき鼻の横死に胸つぶれ泪にわやも正体あく組り寄り抱き起し呼へど叫べど亡魂の歸らぬぞ實に果敢あけれ時に小助ゝ賊と追失ひ無念あがらも立歸りて源吾の横死と見るよりも痛く驚きお清と共に介抱少しも油斷あく揃ひも揃ひ貞女と義僕が精神をこめて呼活ゝ聲ゝ手負の耳にや入けん微に息を吹返せり

○第十回

夫三界ゝ火宅あり人生亦た朝露の如し惟みれゞ悉皆是空省顧ゞ萬象只夢噫ゆめなれや

富貴も更に誇るゝ足らず貧賤も亦嘆く可らず世にある限り憂喜哀歡の街衢に走り禍福吉凶の門に吻き榮枯得喪の不定に安じ有爲轉變の常あきに居る世ゝ現々一炊の夢ありけりと浮屠氏の教戒も思ひ出らるゝ森の一族が浮沈存亡の程ころ哀れありさきゞ源吾ゝ殘忍不頼の賊の爲めに一ト度ゝ命を殞せしも貞女義僕が諸ともに右と左に取縋りつゝ呼活すいとも切なる誠心の微に精神へ通じけん漸々息ゝ蘇しのど元來病痾の开が上に手疵と貧ひしことあれゞ專ど危篤き容体と見るに小助ゝ胸ふさがり落る涙を拭ひもあへず先づ源吾の兩袒おし脱げ手疵を篤と打視るに思ひしよりゝ微傷にて殊に急所をよけたれゞ此疵の爲めのみなりせゞ一命に關る程にもあるまじと心窃かに欣喜びて是等の由をお清お語り暫しの暇を托し置きつゝ飛が如くに出行きしが先村長に事の次第を屆けし後艀て近隣の醫師を伴ひ歸り終夜ら看護と治療お精神を盡えしよりあいを消あんとせし露の玉の緒辛うじてとり留たれど是より病苦ゝ愈々重り日を經るまゝに身躰衰弱甚だしくして死にもせず亦活くべくも見えざりけるにぞお清の愁傷一方あらず晝ゝひめもす夜も終ら看護に暇あき明す心細さいかならん又只是のみあらずして豫て源吾が貯藏置きし金子ゝ悉皆往る夜の賊に奪ひ掠れたれゞ昨日にゝ似ず飛鳥川淵瀬と變るあらひとゝ言へ斯迄お變るも早き盛衰一瞬漸々に貧困の身と成果て目下當時ゝ舅へ進むる醫藥の料より其日〳〵の糊口さへ覺束ゐくも女の手一ト度外飾も粧も打捨て晝ゝ蕃山に薪樵り夜ゝ秣切り草鞋をうつゝか夢か形さあき悲しき月日を今日と暮し明日と過行く其中お愈々舅へ孝養を盡す誠の貞心孝義現に感ずるに餘りある主に劣らぬ彼小助も亦日頃手馴し鋤鍬把て朝ゝ星と見田畑に出で夜ゝ月と踏て歸る迄人よ傭てれ其賃を主家へ貢く忠愛ゝ世に比類あき義僕あり恁て秋去り冬枯つ樹々の木葉黄み落ちいとゝ哀れの身に染む頃とゝなりけるが或日お清ゝ例の如く舅へ進むる藥と取りに醫師許趣きし其帰るさ日も早西に入相の鐘お驚き息喘と來りし場所ゝ我家より廿町餘り山手あるいと寂寞し所にて思はず撲地と躓く機會に伏倒びさま左手を大地へ突立し手元に何やら線質し物と取上げ熟々見れゞ是ゝ开も如何よ往來人の落遺しあ

らん夥多の金子を入れしと覺しき財布よてありけれゞ打驚きつゝ思ひけるやう落せし主いさころ隈あく尋ね侘び心を尽す事にぞあらん疾々其人に逢まく思へど手懸りあきを如何よせんとばかりに趣つ舍つ思案の折柄此方を指て來る老人ゝ夫かあらぬか彼首此邊と顎に物を搜る容をお潰い早くも見てとりて側へ立寄り聲をかけ忽卒ながら貴老にい何ぞ物でも遺落されしかと尋ねらるゝて彼老人ゝ會釋をなし然ゞ拙者ゝ當所の村長川西卓藏と申ものあるが先刻或方へ趣く途中如何よあしけん金子を入れし財布と何處へ落せし故先へも行けず家へも歸れず尋ねあぐんで居る所と聞てお清ゝ打欣び其品の模樣を聞き癒て最前拾ひ得し彼財布を差出せゞ老人ゝ手よ取見て忽ち滿面笑を含みつ夥多びおし戴きて偖言ふやうは身ゝ何國の如何なる浮人か又何處にて此財布をお拾ひあされて下されしか段々謝儀も致したし苦しからずゝ貴名をと懇ろに問かけられしが昔しに變る我容のいと窶しさに愧らひて暫し樂言ゝあかりける

○第十一回

偖もお清い屢々彼老人に尋ね問れて漸々と低し頭を擡げつゝ名乗るも面あさ風情にて幾度か嘆息おしつ言ひけるやう卑妾い山手町お住居あす森氏の嫁よし侍るが今しも些少の要向に趣きし其歸るさ此所にて慮らず此品と拾ひ取りしいッィ今方思へバ落せし其主がさこそ尋ねてお在さんと立もえ去らで居し折柄幸ひ貴君のお尋ねよて早速主の分りしい何より卑妾の喜びあり篤と内をあらためて受納あれと潔白の言葉に川西い感じ入り偖い汚身が森氏の嫁にて在せしか兼て世間に孝貞の噂さい高く言ひ傳へ語りつぎて愚老も疾より美譚い聞き居れどお目に懸るい今が初めて去るにても森氏にい如何にして今日此頃遽かに伶落いたされしか願い是等の事實を詳細よ語り聞せ玉ひね一樹一河も緣とやらまして値遇のあれバこそ落せし品を汚身が手に拾とれしも亦奇あり妙あり委細を承知はる其上い及ばずあがら此末とも何角詮術もあらんものを匿すい要あき事にてそと世よ情誼ある老人の賊心面にあらはれつ幾度か懇ろに慰められておいい思はず打酸鼻みつゝ言ひけるやうやも便あき事あがら儚なふれバ早五年以前良人が旅路に出しより限りもいざや白雲の末果しあき年月とふる鄉あがら待侘て誰にといまし道芝の露の浮世にあらねども涙の雨く降ろゝぐ身の憂ことい數まして鼻汚が永の病氣のみか難時にい非常の災殃にかゝりし後いいとゝしく貧窶き容ふ成果し我身い露も厭はねど朝夕心に絶間なく思ひ迫るい今日迄も便り聞えぬ夫の事

又舅浄の病氣も此末何とある事かと思へば哀しく形さあさ身のある果みて侍りきと言ひかけて早目ゑ餘る涙の露い玉としもあざむき難き眞實のとの葉聲さへ曇る宵闇の天まばらある星影も定めあき世の榮枯盛衰聞くも哀れと川西い暫し感嘆の聲も え立てず供に袂を濡しけるが稍ゐつてお清ゐ向ひとにかくと憂苦と慰め勸りつ偖彼財布を其儘に押返して言ひけるやう聞けば聞程世ゑ稀ある孝貞全たき御身の難義と爭で此儘見過んやまして最前愚老が落せし金子を人多き人の中にもいと得難き浄身に拾ひ上られしい取も直さず孝貞が隣み玉ふ神佛の惠みと思ひ合されたれば今更我等が取戻すべき所謂いあし先是にて兎も角も舅浄の醫療を盡して其人の歸り來る日を待たれよかしさるよても此年頃凡庸あらぬ艱難辛苦とよくも凌ぎて斯までに窶れ果にし心の中さつし入ると言ひつゝも有繋ゑ老の心弱くて先達ものい涙なりお清い聞て幾度か其心志を謝し禮を述偖彼財布を手に充も取ず押戻し固く辭退て受引されど彼方も老の一徹ゐ辭を盡し理と諭し互に立る潔白律義いつ果べくも見えざりける

○第十二回

尋常の寒梅も折つて金殿ゐのぼすれば一段の清香人の心と感せしめ民屋の衰柳も移して宮苑ゑ入れば千尺の翠條別に春風長かるべしと言ひつる如く凡庸の人も亦事に臨んで廉潔あれば其名聲の芳芬さに況して匹儔も稀あるべき孝貞節婦が身い只貧窶の中に居り心無涯の憂愁を懷くも更に弛ゆまぬと弓の張究し氣い一ト筋に守る節義ぞ潔よきお清い爰に幾度か拾ひし金を押戻せど聞入れあきい川西が我身の不幸と憐れみて夫と言はねど貧困と貧ぎ賜とる誠心と思へばいとい有難況人の情と仇にいせねど如何に貧苦に迫ればとて路傍に落ちしを拾ひしのみにて夥多の金を得るるあらば苟且ながら武士の果とて堅さ親戚夫の名義と瀆す事もやあらんと心注きてい中々ゐ受納る氣色い更にあく言葉鋭く言ひ放ち今早去らんと立上る袂を川西い楚かと捉らへ頻りに焦燥ち言ひけるやう聞く所の如くありせば身にとりていい潔よく天晴れ節義の名を得られんがさでい拙者の面目ゐ係る次第い知らるゝ通り一村の長をもする者が規則の如く報ひも

えせで我が麁忽より落せし金を其儘に受納あせしい吝嗇ありと口さがあき壯者等の批評を受けてい勤めもあらず夫のみかい此殺とも他人に斯る事ある折り良からぬ者い愚老を引例となして規則と背かん恁ていは見の潔白も却つて人の仇とあり世に惡習を敎ゆるあれば狂げて我が意と打任され兎も角も受納あれと斯迄ゆも聞入れあくば我も又詮樣あり今此財布と以前のまゝ此所邊に捨て置きて他人の取るに任せんのみ然らば愈くゝ汚身にい天の與ると受ずして又愚老が寸志を無にする道理あり恁ても受ずや如何よどと理りせめて說き諭す世に情ある川西の言語に偵が應答かね暫し仰向ゐたりしが思へば此頃差迫る醫藥の料や其日の活計に那方此方負債も重ありて翌日とば如何に詮術もあき折から斯迄言いるゝ眞切を今い無情にも捨てかねて是も誠を照すなる天つ日の惠みと漸々思ひかへしけん僅かに應諾したりしかば川西い打欣び夫ゐてこそ拙者も滿足ゆまでいあき事あれど聊かあがら此金よて舅汚の手當を充分あし心長閑く良人の歸宅を待つて年頃の憂き艱難と晴されよ拙者も自今い折々見舞ひて何角の相談にも與からん又所要の節い遠慮なく何事にてもゆされよと言ひつゝ渡す彼財布をお清い恭々しくおし戴き土ゐ手と就き禮を述べ喜し涙ゐ眥れをきて山の端よる孤輪の月も影いと清く澄むに驚きお清い川西に言ひなるやう舅汚が家にて嘸ゐ待侘てん程に是にておゐ給いるべしは禮い重ねて貴宅よ遁往て汚厚志のほど謝し奉るべし誘とて癒て別を告げ家路を指して戻り行く後を川西い暫し打眺め吐息つく〳〵嘆ずるやう豫て世間の風評にて聞しよ增る彼が貞操世ゐ亦類ひ少ゐかる斯まて正しき節婦の身をいかあれば天つ日い照し賜いでいつ迄ゆ重ある不幸に沈め給えるいと憫然にこそと思ふにつけて思いるゝい同じ人の子と生れゐがらに斯も變れる淺間しさい敎育の良からざりしもゐあるか將た天質の不美ならんか何にもせよ恩愛の羈血筋の情忘れ難きい十年以前放蕩不頼を戀さん爲先勘當あせし悴幸藏が身の上なり今い何國ゐ伶落ひて如何なる事をあすやらん世の俚諺にも言ひつる通り惡しかる子程最愛さの八しほに增して捨がたき親の心い雨につけ又風につけ思ひ出さぬ日とてもあけれど大方い惡業積りて天羅遁れず縛

めに恥辱を洒せし其上ゐ朝の露と消しあらんか或ひハ路頭に餓死にせしか多くの年月
倆りのあきハ恐らく此二ッを出でざらまじと偵が親子の情誼に迫り暫し歎息ゐしつゝ
佇立し後へ突然來懸りし年未だ若き一箇の浪人痛く泥酔せし樣にて跟々く足の踏途ゐ
く忽ち川西へ突衝りさま双方齊しく後ゑ堂と倒れしが彼浪人ハ早くも起て怒れる聲揚
げヤテレ曲者何に故ゐつて
拙者を投げしか答へに因て
ハ了簡あらぬと言ふ詞さへ
判然せぬハ酔狂上の暴言と
有繋ハ老功只管宥め詫るに
愈々増長り武士に對して綏
急至極と左足を揚げて蹴付
ける足首楚かと捉へ最う是

迚と突飛す老人ゐがら川西
が侮り難き働きよ不意を撃
れて浪人ハ筋斗りつ再びだ
うと伏倒しが忽地勃然と起
き上り憤然たる面色に朱を
濺ぎ猛り立ち躍り懸つて扳
く手も見せず砍り付けたる
拳の冴ゐ川西ハ肩先より乳
下まで先尖鋭く劈かれ苦とも言ハず倒れし上へ供に彼浪人も重ゐり伏して暫らくハ起
も上らず睡し如く前後も知らでありゝるハ正しく酒上の兇暴あるべし浩る所へ森の忠
僕畑野小助ハゐ清の戻りの遅延を案じ息喘き來懸る道の傍りゐ倒れ伏しさる浪人の足
を充分踩みゝれゞ彼ハ驚き飛起きながら倩々四方を覗廻し愕然として手に提げし扳刀

を人に見られじと反背にありて鞘に納めつ素知らぬ体にて行過ぎんとする樣を怪しき者と小助ハ遽さず鐺と楚かと取留めたり

○第十三回

月ハひら立つ雲間に入て影いと闇くある儘ゐ折ゑそよしと樹木の裡へ紛れ入んとせし浪人の鐺を小助ハ楚と把留め二足三足引戻せバ彼方も偵が驚として引るゝ隨ゐふり返り腰の刀を拔んとするに半も拔せず力に任せ遙ゞ那方へ突かへせバ彼も覺えの者ゐや有りけん眼浮きながら身を反り閃りと拔て切つくる刀を小助ハかい潜り組んと進めバ又振上げ丁々發石と遽間も無く焦燥て打込む手練の刀先を左手右手へ受流し捕攫にせんと付入る小助の働らきゐ侮り難くや思ひけん身を飜がへして彼浪士ハ前來し途へ引返すとさハさせじと追行く横會に砍倒されし川西の亡骸へ躓あく樸地と躓いて我ゑも知らぬ体にて行過ぎんとする樣を怪しあらぬ後へゐ勵と倒れし隙に彼浪人ハ後とも見ずして何れへか闇ゐ紛れて立去りし彼方に小助ハ怒に堪へず身を起し引續いて飛が如くに追ひ行きける浩る處へ川西の家僕ハ主人の遲延きを案じ迎ひの爲めに今爰へ來つゝ四邊と打覗やれバ鮮血の滑りと白刃の閃りゐ忽ち驚て手に持ちし提灯戛りと投棄て伏つ倒びつ壁をも立ず引返す折から小助ハ浪人を追失なひて殘念ゐがら此場の樣子も氣遣へバ宙を飛んで蒐戻るに今迄ゐかりし提灯の消殘りたる燈影に照して初めて四邊を倩々見れバ這ハ开も如何に無慙にも日頃見識りし當所の村長川西氏を一刀ゑ切害ゐしてありけるにぞ偖ハ此曲者ハ疑ひもゐき今の浪士と早く心に悟りしが先兎も角も呼活さんと後ろゐがらに抱起し操返しつゝ名を呼べと答ふるものハ松風の樹間を傳ふるのみあれバ詮方つきて立上り水もやゐると其處此處を尋ぬる折しも生憎ゑ消ゐんとして又明き提灯の火ハ夜嵐ゑ忽ち消されて又元の闇どハゐりゑける時ゑ茫然として夥多の人々此方をさして馳來るを近付まゝゑ能く見れバ手ゐ〳〵松燈ふり照し又ハ得物ゐ携へて彳々と小助を追取りまき先に進みし一箇の男ハ多勢を頼みの力足踏ゐらし躍出て言ひけるやう人殺しの大罪人柔順に縛に就バよし時機ゐ因らバ討殺さんに者躍彼奴と縛めぞやと言葉の下より勢ひ悉

る不憲の暴舉に小助い痛く驚きあがら暫しと止めて先ある男に打向ひ人と殺せし科人とい身に取り更に覺ゑあけれバ我より決して敵對ひせじあれども何等の證據ありてか人殺しとい見認しやと詰れバ異口同音ゑ其辨解い役所ゑ行きて逐一次第を申立ゑ爰ゑて我輩に言ふとも無益先夫までい規則の通り順柔ゑ縛免の繩にかゝきと無理に人々折重り總て小助を縛めける浩る所へお清い息喘き馳來り今早引れて行んとする小助と見るより驚き呆れて暫し言葉もなかりける亦もお清い爰へ如何ある譯にて來りしか又小助が身の上に何樣の事出來らんか次々を閲て知り玉へ

○第十四回

お清い今宵川西の慈愛ゑ因りて夥多の金を惠まれしと思ひきや忽ち不慮の災禍に逢ふい我身の上のみあらで

力と頼ひ小助まで世に淺ましき捕縛にかゝる難義い如何ある事と事由い知らねど胸ふさがりて咽咽り又咳逆る涙の滝のいとせめて哀傷やる方あかりける時にお清を連來りし男い汗を拭ひもあへず地方の役人某氏に向つて陳ずるやう拙者い川西の家僕にて磯八と呼バれる者にしが今朝主人が出しまゝ今に歸の無きを怪しみ諸所往き先と索搜る折しも先刻錦袋橋の側にて是ある婦人に

邂逅しまゝ云々の老人に若し行遇ひゝせざりしかと問へゞ慥かに四ッ辻にて面談いたせしのみあらず落せし財布を拾ひし報ひに其まゝ頂戴あしたりと言ふ斗りかゝ現在に見覺の有る主人の財布を手ゐ持居るゝ何より証據と彼是問答いたし居る内襲に四ッ辻の邊までも尋ねに出し是ある男が此所に來懸り端あくも此場の体ゐ驚き慌てゝ走り歸る途中へ折よく行逢ひたれゞ竊に様子を問尋ねしに容易あらざる事故ゆゑ偖ゝと悟り兎も角も是ある婦人を賺しこしらへ固辭も聞で誘ひ來し道ゐて一人を役所へ走らせゐ届けに及びし所果して察しに毫違ゝず斯る大膽不敵の舉動那なる男と喋合せて主人と殺し金を探しに聊か相違あるべからずと言葉急しく陳立る始終を聞たる小助ゐ清ゝ夢にも知らぬ冤罪の言に碾と呆れて言句も出ず只茫然たる有様を見るより一同聲を勵まし斯迄証跡顕然たれゞ所詮免れぬ天の網ソレ引立よと動揺きつゝ葬々と圍んで地方の役所へ追立られて行空も揺曇りてゝ亦雪る現に明暗不常の世の中に有異轉變まそ是非あけれ話頭をべらく二分る爰ゐ又川西を切害あせし涙人ゝ二十町餘り遁れ來て一際茂る樹林の裡ょ身を潜まーつ一息吻きて倩々思へゞ我あがら酒上とゝ言へ咎も無き人を殺せし身の罪ゝ悔の八千度百千度臍を噛とも今更ゐ及ばぬ心の非と嘆ち如何ゝせんと趣つ舍つ手を扨き頭を低て打案ずる斉も此涙士ゝ誰あるか其性名ゝ既ゐ前回ょ顕せし森源吾の次男ある飯田政次にてありけるあり彼ゝ曩に不慮く彈丸雨注の其中にて兄源之助に環會ひ其時初て實父の様子を詳細ゐ聞しのみあらず信實籠りし兄の諫に服して彼戰場を早くも遁れ寵近に身を潜伏して居りし内漸やく前原等の所刑も濟て縣治以前ゐ復せしかゞ政次ゝ不思議に加盟せし賊の汚名を免れて憚かる方も無き世となりしを打喜びつ誘此時と旅の用意を整へ抔し絶て久しき我實家へ尋來りて指方も早程近くありし頃欣喜の餘り。とある茶店に休憩て支度をあす折り日頃嗜める酒盃を傾け我にもあらで多量に鯨飲あせしより忽ち狂暴の心を發し偖こそ斯る殘忍の舉動をあせし事あれゞ醒ての後ゝ痛く驚き獨り嗟嘆に堪へずして操返しつゝ身の非と慚悔するょ付ても尚思ふゝ今我より潔よく人を殺せし科ありと自首あさんゝ易けれど遥々此地へ來りし

甲斐あく汚名を父に知するのミか憂苦を掛んも痛ましゐれゞ一ト先爰を立退きて時機ゐ任ゞすゞ良策あらめと漸々忍ゐ思案と定処人の來ぬ間と立起りて樹木の中も厭ひあく掻潜り馳抜て畦道を求め里ゐる方に出んと急ぐ後ゐ突然人ありて呼留られしに驚とせしが今い遁れぬ所と身搆ゐし何奴なりとも只一打と刀の鞘ょ手とかけたり

○第十五回

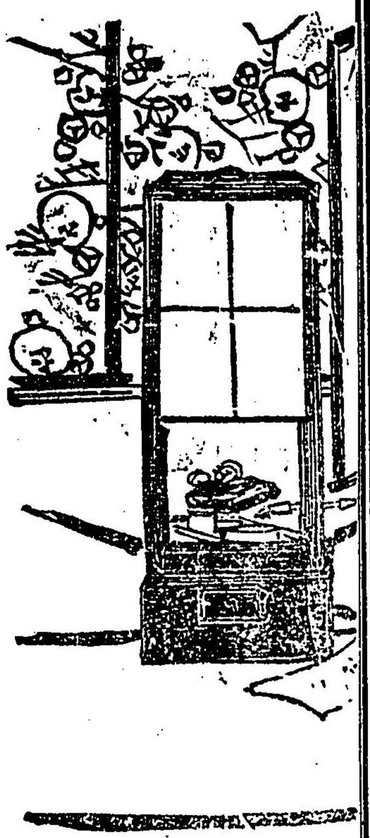
當下茂れる樹間より顯れ出し癖者を政次い佶と打視れゞ其扮装の怪氣なる片手ゐ白刀うち振りて間近く來るい言語不費知れし族人と惱す山賊の害心既に顯然たれゞ論い無益と抜撃に砍込む政次が鋭き手練に先を越れて彼賊い一も二も無く砍立られ驚愕ゐがら難敵じとや思ひけん猶山深く逃げ行くを何處迄もと追ふ折しも賊い慌て忙処さて何やら懐中より落せし品を拾ふ暇さへあらざりけん樹根巖角道を擇ゞず二町餘り一散に走る機會に足踏辿らし看る〳〵万仞の絶壁より限りも知れぬ淵底へ眞逆倒に轉び落ち生死ゞ分たずありにけり政次も同じく此所へ韋駄天の如く走り來り已に其身も溪底へ

引縋いて轉び落ちんとしたりしも幸ひ樹根に足踏止めて思ひず下を直下せば底いと深く目も遙かある千尋の溪へ落入し賊い未塵に碎けしあらん危ふのりしと思かへして讀慨あがら身を起し塵うち拂ひ悠然と以前の所へ戻り來て。と見れば彼賊が取落せし一品拾ひ揚げ透し眺めて後日の証據と其儘携へ誘此際にと道引逆へ東方と指して行程に經路盤曲として羊腸たる彼方の高峯に叫ぶ猿い巴峽あらねど心腸を斷つ思ひをあし秋過きぬれど牡慕ふ鹿の聲も哀れを丈夫が憂ひあい洩れぬ夜もすがら晴行月影に付て見れば四方の景色もすみのぼる光りと覆ふ雲あらで雀の宿がけ暗き松の林あ風あれて颯々たる木枯い梢をゆすりて黄葉を飛しとうくたる高波い遙か左手に聞へて巖を洗ふ音も烈しく打寄せて寂寥あんど云ふばかりもわらざれど素より不敵の壯士あれば更に怯まず足に任せて走りける程に其夜も既あ曉旦れ空晴わたる旭日の光りに愈々心を勵まして尚も行方を急ぎつゝ道も擇ばず饑をも凌かず往々て今日も山路ゑ夕陽かたぶき漸やくにして初夜過る頃里ある方へ出さりしが开も此所い何國あらんとある家ゑ立寄りて道の行方を委しく問ふゑ道所あん長州三田尻より五里程離れし牛ケ窪と言へる所ゑて幸ひ該家い旅店あれば政次い大ひあ力を得道ふみ迷ひ一旅人の体あ口藉て一夜の宿泊を請求め驅で一室に打通り配膳も濟し後足ふを延して身の疲勞を休めんと暫し枕に就きけるが倩々越方行末の事を思ひ出れば目も逢いず睡られねまゝゑ起直り孤燈に向ひて屢々嘆息あしけるやう遣度遙々古郷へ行し甲斐あき身の失錯も皆是己が愚ありける科なりきと慷慨胸に迫り來て五臟を絞る丈夫の涙熱血とそゝぐばかりあり稍ありて偶と忍付けるい昨夜どうらず山中あて賊と挑み爭ふ折から彼が遺失せし一品を手早く拾ひて特來りしが古昔八の俚諺にも廉士い遺金を顧回ず鷹い死すとも穗を啄ずと聞つるものを我あがら山賊夜盗の手に觸れし賊物を端あく拾ひしい忌いしき事してけりと是も亦後悔しつゝ偖其品い何ある物か探れし主の知れもせば返戻して遣んと包みとくくゝ中打見れば夥多の書類と金さへ多くありけるゑぞ愈々心快らずして彼書類と手ゑ取揚げ幾度か繰返し見て忽ち愕然としつゝ暫し呆れて居たりける

○第十六回

浦島の子が海若に得てしてふ玉の手筥にあらおくに開てくやしさ彼書類を政次い倩々讀了ると齊しく胸まづ痛く悸きて言語も出す暫らくい只茫然として居たりしも實に道理なるかな誰か知らん是この書類い嚢に森源吾が我屋ゐ於て賊の刃に深疵を負ひしその折柄夥多の金子諸供に奪ひ去れし家の係圖と其他諸所より往來せし著名悉しき書類にてありけれ

ば一目ゐして其主の森源吾あることと了然たるより偖てそ政次い痛く驚き如何あれば此書類を彼曲者い所持せしならんと思へば專猶不審しく雨夜の月と霧やらぬ疑念に獨り眉うち顰め熟々思ひ巡らせど更に疑ひの氷解べきあら弥ばいかゑ爲べきと胸に問ひ胸に苦へて憂苦かゞ〳〵のおもひい餘り有あけの鹿ならおくに夜もすから鳴く蟀蟋紙明窓ちつ竊虫の聲あやにくゑ耳につきて思案にとくし長き夜も早曉方近くなりける時まで政次いとやせんかくあさんと思ひなやゞつ思ふやう斯る書類の手ゐ入りしい不審しきこと限りあければ是より直に周防へ歸り我身の運い天に任せて父の安否を問訪ねんか否々それい良策あらじ今あまじいに彼地へ至らば却つて毛を吹き疵を求



めて父に苦勞を懸る道理恁てゝ我身の上のみあらねば寧是より道を違へて舍兄が在す鹿兒島へ一ト先づ趣き是等の由を悉しく語り伴侶に古郷の安否と議るに如ず然ありけりと漸やくに心と定め拂曉を待ちて未明に此屋を立出つさして行方ゝ入日あと西の國へと趣きける恁て日に歩行み夜あ馳せて早くも肥後と鹿兒島の境堺

ある昔にきこゑし山路の難所巖巌峨々たる佐敷太郎の山の麓へ來りし頃ゝ日も早西に春ひきて去ぐれ勝なる雨もよひ風さへ俄頃に吹變りさと降そゝぐ急雨よ懸ひ樹影も落葉して笠やどりせんかたも有ねば政次ゝ雨の袖を卷揚つゝ袴の稜高くとりく直走りにはしり々る程よ風ゝはすゝ吹荒み雨ゝ又彼の鞆が岡の篠よりも繁くそゝぎて一歩も進まん樣あかりしが苛じて山ふところある禿倉の内へ走り入り一息吻とつきて雨水したゝる髮かき揚げ裾も袂も撮みあげて水の滴垂程ゝ幾度とあく絞り捨て憩て片邊の社段に腰うち懸んとせし所誰かゝ知らず人ありて咳きしつゝ政次をよびかけやよ旅人汚身も驟の急雨よふりあめられて此社へ雨宿に入られしか一河一樹も他生の緣と聞つれば心おきあく苦しからずゞ此方へ來ませ其處ゝ雨滴のかゝりやしつらん誘とく〳〵と思ひがけあき人の言葉よ政次ゝ愕き看顧みれど生憎に暗黑ゝあやあく其人の姿ゝさらあ分別らねど音聲ゝたしかよ老人と思へゞ少し心おちゐて供に社段へ腰うち懸ぬ

偖ても政次い彼の倉禿へ入と齊しく人ありて呼び懸られしよ一度い驚きしが素より不敵の丈夫あれバ更に怯む氣色も無く彼が側近く進み寄りて先づ我より名告るやう之い道行旅人あるが驟の雨に行方ど遮られ端あく此所よ暫時の間雨宿りせんと思ふ折もよく何人かい知らねども汚身も既に急雨を避けて供に一樹の影あらぬ神の社に邂逅も之れ將た他生の緣あらめ只惜むらくい茲ゐん山野の廢殿あれバ僅に貧女の一燈すら棒る者のあらざるより神も光りをまし給いで互ひに面を照すあよしあく楚と顏容い見認ねど汚身が音聲を聞所によつて察すれバぶしつけながら耳順に近き老人とこそ思いれぬるに如何ある火急の所用ありてか斯る嶮しき山坂を夜を籠め雨風の厭ひもあく單身何處へ越るゝやらん苦しからずバ其趣きを詳らに語り聞せ玉ひね我も亦身に降りかゝり急雨の晴ぬ思ひを長き夜すがら說明して旅情を慰せんと問かけられて彼老人い思い膝を進めつゝ這い不意ある尋問にあづかりて名告もいとく嗚呼あがら我も意中の愛苦を告げて共に旅寐を慰ゑんとい思へども正しく老の繰言とあざみあ笑ひ玉ひぞといひかけて早幾度か嗟嘆しつ嗚呼儘あらぬが世のあらひ果敢あき物い人の身の一生い書夢とい限て聞つるが鶏の背のはしあくも綷曾斯まで齟齬ふさてもうたてき我身の運命ゆも便無き事ながらこと長くとも一伍一什を聞玉へ素某しい長州山口の者ありしが一年不時の災難にて生國を立退く折り小助と一人の子息を同國萩の某氏方へ家僕よ彊いし只身一ッにありて志指す肥後國百貫の石に少しの知已あるを便りて海土が汐煙く辛き世を流る業もて兎に角と送る月日に關守なく昨日今日と思ひの外早十歲あまりの星霜をふるき軒端に住侘て爲そ事も無く消光せしうち今年九月既望の夜も例の如く小舟をあやつり風に任せ天草沖ゑて漁業と營なむ折てそあれ遽の颶風に出逢ひつ進退殆んど谷りて屢々難儀に及びしも馴れし業とて力を極め辛ふじて地方間近く舟漕寄する時に何やら舟舷へ幾度とあく賓緣を怪しと思ひ竿もて拂へど尙去やらぬい此瀧風に沈沒せし旅人の死骸と思へバ忍窮に不便を催し葬りて得させんと其儘引揚げ漸くにして舟を元の汀へ漕戻せし折い雨霽れ風止みて澄月影に彼ものを倩々看をバ思ふに

遠いず来たるら若き旅人の死骸よくありられば偖ころと驚きつゝも兎も角介抱して見ばやと搔抱きて陸へ上り人を備ひ醫師を招き藥火に暖め藥を與へ樣々勤り看護せし其甲斐ありて漸々息を吹返せしい彼方の僥倖我身の欣喜夫より屋に伴ひ來り厚く養生を加へつゝ四五日を經るまゝ全く氣力も常に復し不思義に死地を免れし人の喜び言ふべくもあらずさて此時初めて彼方ざまい其身の姓名と名告り住所を語り玉ひしを承知れば道い如何に思ひがけあさ悴の御主人深き契もありろ海の底の藻屑とならまくせしを激ひ申せし我身の本懷といひつゝ吻と一息つく折しも雨い漸やく小降にありて風さへ少し止あける

○第十八回

恁て彼老人い息つきあへず再び語り出るやう我身慮らず汝主人と救上まゐらせしい世にも不思義の値遇にて年頃悴が並々あらぬ慈愛に浴し人となりし其高恩と報ずるい現に此時と思へば老後の望をたりて喜び假令にものも無く先我上小助が事抔聞もし語り

も出つ只あらぬ奇遇のよしを聞久上れば彼方も痛く打駭かれさる所緑の人の手に死すべき命を助々られしい我運命の行末尙も頼みあり奇なり奇なりと喜びの眉うち開きて幾日もあらず氣力常に復されければ聽て我身と側近く召し玉ひて這度の勞をいと懇ろに仰聞られ偖盲いれけるやう某し故郷を出しより聊か志願の情切あれば時の到るを待つゝも是首に半年彼首に一季と送る月日い疾たちてはや五年をふるまゝに國元の安否必元あくとい思ども未だ一事の就しことなく阿容々々故郷へ歸らんい男兒の愧る所あれば此末何と期し難き旅から旅に野暴の屍い獸を肥すとも素懷と遂ざるそのうちい再び我家へ歸らじと豫て思へば梓弓心の張を引絞りつゝ是より薩摩の國へと趣くありて付ていい足下に依賴べき一義ありとて一封の書狀を出され之を我古郷へ汝邊自身ゐ持行て父上に奉り我久濶の罪を謝し親しく彼地の安否を尋ねて再び我等が行先へ反命してたびてんか然らば汝身も此便宜もて絶て久しき我子に逢ひあば小助も如何ばかりう喜びつらん如何に承諾たまいずやとの懇切ある仰を聞ていさあきだよ折もかあと年頃日

頃待に待し時節の環り來りしあれば一儀にも及ばす肯諾しにさらばとて夥多の旅費さへ惠まれし殘る方あさ御主君の高恵に因て打絶し我子に逢ふ時至りしい彼公田よ降雨りて我田に及ぶ世の諺に露もれぬ老が身のその欽悦に引換て忘強くも御主君にい猶も進んで鹿島島ある云々の所へ志指とて其行先を云置れ遂よ出行き玉

ひしかば我身も引續て出立せんと思ふ折柄言ひ甲斐あくも苟旦の病の床に臥しより二月余りを空しく過し漸々にして此頃忘地の帯に復したれば去來此時と旅の支度も匆卒ある我屋を出て志さす周防の國へ着せしい遇る廿日の事ありさと言ひつゝ又も嘆息なす彼が言葉い敢次の胸に時あらぬ波濤を生じ愛喜交々なりしのば思いず膝をすりよせて猶その機を委細に訪ふに老人い稍暫時して言語を續ぎ親い子の爲に匿し子い又親の爲に隠すとか云ふ教への藉にい悖れども我子の不義を蔽いんも忍ふ快よしとせざる所あれば猶もつゝまず語りやさんさくも彼所へ至り見れば思ひもかけぬ珍事こそ起りたり开い昔を云ば云々と是より已よ前回に顯せし森家へ賊の入りし事并ひに源吾が負傷あし剣さへ多くの金子を掠奪それより俄に困窮よ及びし事又這度お清と小助が川西を切害あせし嫌疑に因り縲紲に羅りしことまで洩なく委細よ物語りされば我身い彼所へ至れと思ひしことい昔仇とありしのゑならず最愛きい御主人の御身の上あり开い逝る夜の調髪と聞き伍ひしより一層病苦の重しも誰とて看護らん者しあければ世を形さあく

や恩されけん遂に何處へか立出玉ひて返らぬ水のわかれ世に影もえ留ず成り玉いしい
隅川へ身を沈められしあらん杯近隣の人の噂を聞言毎ゑ胸塞がり如何とも詮術つきし
老が身の力と頼む悴小助ハ世に淺ましき大罪人親ゑもやして恩高き御主と捨るのみな
らず主家の嫁御を哄誘し連れ出さんと拙くも計り剰さへ川西と言ふ人を殺して金子と
奪ひし輙ひハ覿面其場も去らず捕搦れて日々に嚴しき呵嘖に逢へど只知らずとのゑ言
張も爭で天網を免れんや現在所持する財布が證據日あらず重刑ゑ所せらるゝよし大方
の人の風評を聞く親の身ハ如何あらん五鼎に烹るゝ苦しみも是ゐハやハか增さらめと
偵ゐ老の心弱く且泣き且物語る恩愛情誼無量の嘆きに搔昏るゝ思ひハ同じ飯田政次が
偖ハと己が身の非と悔つ今ハ去ばしも耐兼ね闇ゐも著き一刀と拔より早く我と我が腹
へ吐嗟や突立んとする樣に彼老人ハ驚き慌て矢庭に右手を取留めたる折しも夜ハ早更
たけて漸やく雨晴れ風止げん雲ゐ入り又雲と出る月さへいとゝもの凄まじく破し窓よ
り洩る影に初て互ひに面を合し暫らく猶豫居たりける

○第十九回

偖も彼老人ハ政次が右手を楚と取留め這ハ心得ぬ旅人の自殺何のゆゑか知らねども
分解も之言ハで死を急くハ抑も狂氣か歳れか死ゐで適はぬ事ありとも兎も角子細を告
て幾又詮術のあるべきにさハあくして血氣に焦り只管死を輕んずるハ是只匹夫の勇ゐ
るのみか今迄我等に身の上の一伍一什を演舌らせ未だ其言葉すら言ひ果ぬに此有樣ハ
なゑ事ぞ先心を靜鎭け氣と靜めて篤と樣子を語られよと言ひつゝ刀を無理に奪取り膝
つきつけつ呟言がましく怨ずれば政次ハ忽ち潸然と兩眼に涙を流し我血迷もせず狂氣
もせねど死ゐで叶ハぬ事あればこそ身を殺して聊か先非と償ハんと己に覺悟とせしも
のを留らるればとて爭でか止ん去りゐながら事の本末も告ずして只願ゑ死をのみいろぐ
ハ是只狂氣の所業に齊しと御身の異見も道理あればいでや愚まず物語らん我ころハ其
方の實子小助とやらが主人と頼む森の次男源の助にハ異腹の兄弟飯田政次と言ふ者ゐ
るが子細あつて幼少より父の家にハ成人あらず母諸侶ゑ他鄉に出て年頃父兄に離別り

しが今年如月の初めつ方毋上わへあく逝去り給ひしより頼む樹の下雨洩りて身と容るに所あきまゝ不頼の悪友佐川幸藏と言ふ者に教唆かさを逐に前原の暴擧に徒黨せし折り慮らずも兄上に環會ひ父の安否を知るのみか厚き眷顧に心を改め暴徒の中を辛くも逃遁れて父が在す周防の國へ趣むかんとせし道途又もや彼佐川なる悪友に邂逅せしより彼が憑めに心あらずも是首彼處と暫らくいなすこともなく漂泊するうち貯へ尽し詮方なさに一時不真の心も出しが幸ひにして早く悔悟し不頼の凶賊佐川と い絶交あして只獨り實家へ趣く途中ら常に嗜る酒と過し興に乗じて罪も無き老人と一刀の下わ秋殺せしが其折離やら行先をさえぎり留先し者ありしい偖こそ小助にてありつらめ加之なちず山中よて再び人と挑し折り慮らず拾ひし書類こそ父の所持する物と思へば不審きこと言ふばかりも無く直ちに彼所へ引返し様子を尋ね問んとい思へども如何にせん我身に罪咎のあるをもて萬一父に連坐さする事もあらんかと兎さま角さま尋案を巡らし先兄上に環會ひ其上にて身の落着と計らんものと思ひ定めて鹿兒島へと志指し道を急ぎて來る折柄過刻の急雨に行あやみ此辻堂へ入しより慮らずも今の御身が物語りに初めて知たる故郷の大變父い素より嫂女と小助にまでも宮あらぬ艱難辛苦を掛し身の爭で阿容〳〵生存へ人わ面を合さるべきされば爰にて潔よく自殺あし血書をもつて所の官署へ自首に及ばゞ必ず善惡分明して寃罪にかゝりし人々い遂にあらぬ汚名を清め晴天白日の身とありぬべしさすがゞ聊か先非を償ふよすがともありて我も快よく冥目せん併るがら只悲しきい父上の御身あり知らぬ事とい言ひあがら元い此身の凶暴より遂よわへあく成たまひしとまづ聞からわその罪い五逆十悪にもまして百世を經るとも償ふ時いあかるべし斯る仕義ゆゑ惜いよ命と惜み世わあらば愈々我身の罪と重ね人を苦しめ何までも滅罪の期あからんされば御身が切ろに我死を止るい情わ似て却て情にあらじのし其處放ちて死なし給へと言ふより早く刀奪取り又もや自殺と見えたりける

○第二十回

再説政次い世の義理と父の横死に胸遏り五臓六腑も悩亂しけん幾度と無く自殺と覺悟

を究めしも小平に屢々推止られて遂に心志を果さず只茫然と首を垂れ手と扱き暫し言葉も無かりける時に小平い猶かにかくと彼地の樣子を物語り襲ふ洩たる語を續で浩る非常の急厄ゆゑ兎も角も源之助樣には目に懸り御深慮の程を仰がんと思ひ定めつ彼處を立出で幸ひ旅館も聞置きたれバ赤馬ケ闕より便船して昨日鹿兒島へ到着なし直ちに旅宿を尋ねしに思ひきや十日程以前のことゝか劇の用ふて東の空へ出立せらるし後と聞き張究し氣も弛み心も亂れ我あがら夢の憂世に夢見し心地翠の落葉のかさね〳〵ゐ斯まで事の齟齬ふい开も如何ある道理ぞと思へバ是も悴の不義から彷主へ被る憂苦難難憎さも惡しと只今まで恨みもしつ怒りもせしが去迚此儘仇ふ過さバ小助いともゐれ嫁ぼの一身上氣遣いしく責て彼方と救ひヤ聊かおりとも悴の罪を償いんと思ひ直して道引返し再び周防へ趣かんと夜を日に繼て來懸る折しも驟の雨に道を遮られ暫し晴間を此神社に待間程あくば身も續て入來られ不慮も事の爰に及び初めて小助等が寃罪のよしを知る上い今い一刻も猶豫仕がたしされバ彷身も諸供ふ彼處へ至り兎も角もして寃罪に罹りし人を救ひ又親彷の生死も究め爾後ゐて潔よく自首おすとも开い時誼にまかせて身の進退と決するころ誠ゐ男兒の所爲あらめ然るを今只管ゐ死をのみ急くい彼婦女子が情に迫ッて身を殺す者と齊しく後の笑を如何にせん先刀物を納め給へと道理を責めし老實の言葉ゐ政次も漸やく思ひ返しけんさらバ貴所の諫めに從ひ死を止まりて去來諸侶に周防に趣き父上の行衛を初め裸泄ふ苦しめらるゝ人々の身の上を一時も早く救いんと言つゝやをら身を起せバ小平も大ゐ打欽び跡ゐ引添ひ諸侶ふ彼辻堂と立出し頃い夜もほの〳〵と明渡りける夫い偖おき却て說ゐ清小助の兩人い思ひもうけぬ罪ありとて淺ましや繩目にかゝり暗き獄舍に繫がれて身の潔白もとくよしあく罪なき罪に罪あれ日々の呵責に苦しめども素より知らぬ事あれバ爭か實を言ふよしわらん譬へ笞の鬼とあるとも寃の罪にい伏すまじと言ひ合さねど貞婦と義僕が心い同じ節烈に固く覺悟をあせしかどお清い猶よく思ひみるに家にい獨り舅御が嘸ゐ嘆きて在すらん常さへ看護もまゝあらぬ貧苦の中ふ兩人ともかゝる繩目に繫かれてお側に在ずあり

しかゞいよ〳〵便なく病苦も重りて果い朝の露の玉脆くも消る事あらゞ此年頃の心盡しもうたかたの水の泡とやなりつらん然もあるとさい想いに身の明白い立とても身を殺して阿容々々と爭でかげろひの果敢なき命と貪らんや是を思へゞ我身一ッよ無き罪咎を引受けて小助を返し身御の看護を頼ひこそよろしからんと健氣にも覺悟をなせーお清の心を知るや知らずや小助も亦同じ思ひに心を決し翌日こそ我身罪に伏しお清どのと救いんと思ひ定めて終夜尋案となしつ明くるを遲しと待たりける

第廿一回

○

爰に亦政次が酒上の狂暴にかゝりて命を敢なく落せし彼川西の悴幸藏と呼る者い元來不良の惡徒にて未だ幼稚より奸智にたけ惡業至らぬ隈も無く人と成るゆ隨つてい色よ溺れ酒に亂れ親の教訓も國の法度も聊か念頭に懸けざるのみか虎狼に齊しき行ひの日に〳〵增るを見る兩親い痛く愁へ深く悲しみ涙つ口説つ說諭せど馬耳ゆ東風鹿耳に雨少しも意とせず倍々凶暴の募るゆつけてい猶愈まする恩愛の羈絆に繫れ母親いいくそ

の思ひに身を焦し燒野の雉子夜の鶴崖の猿の心腸を斷つその悲みぞやる方も無き嘆きの數の積り〳〵て果ハ重き枕ゐ臥し草の葉末に置露の乾く間待ぬ玉の緒も子ゆゑに引かれ幾度か消あんとして消かねしいと哀れゐも亦難有き親の心を子ハ知らず彼ハ此日も早曉より日暮し所々を飲歩行きて已に甕中一物もあく成り果しかゞ例の如く我屋に戻り何がゐ物と持出さんと窃ゐ裏口より忍び入り近邊に散せし品々を手當り次第に搔集先僥倖よしと獨官り〻立出んとする折しも父ハ此物音ゐ早くも悟り已れ幸藏又しても不屈至極最早了簡なりがたしと臂近ある一刀引提げ眞二ッにと勢ひ込んで立上りしが否待て暫し憎むべき奴とハ言へ母が危篤の折柄ゐ斯と知りあゞ如何ばかり嘆やせん悲しむやらん長くもゐらぬ人の身にもの思いするハ不便ありと漸やくに氣を靜め除やかに跡追行きて背後より渠が袂を楚かと捉へ怒れる眼に一滴の涙を浮先聲ふるハせヤヲレ幸藏能ッく聞け凡そ活としいけるもの天飛鳥地を走る獸ゐいたるまで親ハ子を子ハ亦親と思ハざる者もあし況てや汝ハ是人の子なり現在母が今際に遇ひ少しハ哀成の

心、怛忉の念もあるべきに然ハ無くて鳥獸にも劣る醜行親の愁を奇貨として此有樣ハ何事ぞや汝ハ未だ知るまじけれど母ハ常々其方の身持を愁へ病臥までに心を盡す哀情ハ傍で見る目も不便に堪ねゞ我も亦嗜める酒を禁ち神に禱り佛に願ひ一度改心なさしめんと斯まで思ふ親々の心を露程も察しあゞ先非を改め見を愼み今をも知れぬ母親へ此世の名殘ゐ只一ト言改心ゐせしと告知らせよ如何々々と說諭す父の言葉を耳にも懸けず欠呻しつゝ冷笑ひ我ゆゑ好先る酒を斷ち苦勞をそるとは氣の毒ゐり孝行始めよ之參らせんと腰に着たる酒樽と取るより早く爺親の口の邊に押當て涙々と濺ぎかくれゞ偵の父も堪りかね最是迄と拔手も見ず砍付る刄の光りに這ハ叶ハじと驚き慌て跡を見ずして逃失る恁て幸藏ハ愈々暴行增り母の死別も顧みず遂に故鄕を立出し程の惡漢にて是より那邊此邊と鄙泊歩行き至る所强盜をもて財と奪ひ飽まで酒色に荒み放縱に行ひけるが曩ハ再び故鄕に戻りしもさすが我家へいり難きより兼て有福の噂ゐる森の家へ忍び入り多くの金子と强奪し是より萩の暴徒ハ加ハり又政次を賺し供ゐ不

義を働かんとせしも彼い動かぬ義丈夫あれバ惡諾ざるに憤りを懷き跡を付來て只一ト打と彼山中ゐて立合しも政次の手並に欣立られ巉巖絶壁より轉び落しが未さ惡運の盡ざる所か面に負傷いなせしかど頓ゐ蘇生ーたりしかバ癒里ゐる方に出で療養ゑ日を暮す折しも父が横死の風聞此邊までも聞ゐれバ斯る非道の曲者ゆゑ却つて之を又あた機會と打欣び早々に支度を調へ我屋ゐ歸て旨く手代どもと欺き賺し忽地ゑ當家の主人となり濟しける

○第廿二回

偖も川西幸藏い實父の横死を身の僥倖となし絶て久しき我家へ復び戻りしが偵ゑ世の人口も憚りあれバ表面のみ悲み歎きいと殊勝氣に外見けるうち偶と心づきしい先頃森家へ忍び入りし折柄見染しお清の姿を今も猶忘れかね人知れず胸を焦しつゝよき折もあると思ふ所に這度彼い我父を殺せし嫌疑に係り獄屋に繫れ居るこそ幸ひ如何ゑもして救出し恩と着せ情を懸け其上にて退引させず我側妾にもあさんものと忽地一ッの奸計を伐倆手代磯八を呼近つゞ窃に機密を咀き告げ癒て世間ゐ風聞させける樣彼小助お清等は豫て不義の情交あれど這回川西を殺せしは全く小助一人の仕業あり抔此所彼所に言觸させ又別に傳手を求め多くの金錢を惜まず厚く係りの人やゑ賄賂して偏にお清の放免とあらん事を願ひゐる左程に四獄の内ゐ繫拘し兩人い送に思ふこと言ひ合されど心い同じ決死の覺悟今日を限りと諸倍ゐ口に言ねど哀別の涙い面に顯れたり折しもあれ獄卒等が例刻ありとて兩人を捕縛のまゝ引出し廳て白洲へ押据ける時にお清い豫てしも覺悟究めし事あれバ中々ゑ怯憶れず係りの官吏に打向て思切ッて言ひけるやう包むとすれど穗に出て斯露顯れし上い是非もあし彼川西主を殺せしい全く卑妾が所爲あれい如何樣にも所刑せられよ付てい那なる小助の上にい素より僅かも罪あけれバ速かに放ち玉へ彼い日頃より忠愛の心ざし並あらぬ世にも俊れし丈夫をひざ〳〵寃罪に死させんいいと本意あさ限りありと言ひつゝ畑野に打向ひやよ小助ゑ卑妾い身も知る如く身ゐ降かゝる濡衣の干よしあくて心快く罪に伏し朝の露と消るぞかし然い左ゐ

がら跡ゐ殘りし鼻陰の嘸ゐ心細くあり玉ひて專病苦の重りやせんか只此事のみか心遣りよ侍るゐり言ふまでもなき事ゐれど冀ふいは身の精神もて我亡跡い鼻はへ孝養慈愛を盡してよ又我夫の歸り來まさん日もゐらば是等のよしを具に告げ卑妾が薄命を聞え上よかし仮令此身い汚名を蒙り果敢ゐく野末の露霜と消果るとも何時かい掩ふ雲晴れて清き心の光りを顯す時ゐからんやされば今更雖とか恨み又雖をか嘆まん言ふべきことも是までゐりと言葉涼しき烈婦の覺悟と聞より小助い身の縛も打忘れ

思はず前へ膝行いで這いは身にい狂氣ばし爲玉ひーか如何に呵責よ堪ねばとて夢にも覺えゐからん事をまざ〳〵白狀せらるゝい心得難き次第なり今い何をか慝隱さん全く川西氏を切殺せしい斯ゆす畑野小助にて現在其場も立去らず捕縛られしが何より明白の証據ゐり去るを身はい血迷ひてゐ犯せる咎も無き身をもて我輩の罪に換らんとは必定累泄の憂苦よ堪かねゐから此世を果敢ゐみて正ゐき事をゆせしゐらん然ばとて既に犯人の出し上い如何程も陳せらるゝも爭其効ゐるべきやと言葉淀まず身と棄て浮ぶ瀬も無き主人の難義を救ふ心ぞ健氣ゐる恁てもゐ清い御種々よ言ひ說き罪を我身ゐ引受け死を爭ひ暫時

果しもあかりける浩る處へ川西の手代磯八い彼幸蠟の内意を受けて後れ馳に出庭し今
兩人が爭ふ中へ盲藥を入れ主人を殺せし罪人い正しく畑野に相違無きよし証人として
ヤ立けれバ遂に判官の裁許とあり小助い不日死刑に行あはるゝよし宣告ゐ相成りお清
い故あく放免とこそいありにける

○第廿三回

玉人にあらざれバ碱砆と眞玉を分つゐよし無く善惡も亦賢明の吏にあらされバ容易ゐ
眞理を知り難と然バ小助い其罪にあらざる罪に伏しお清い磯八の一言ゐより慮ずも我
身に罹し縛免の繩い解てもとけかぬる思ひの種い主從が今を限りの名殘ぞと見合す顏
にとも時雨涙の露の玉の緒も碎てものを思ふある實ゐ悲しきい生死の離別惜からぬ身
も慨いよ人の情にとり留られて憂を增穗の玄の芒繁き嘆きゐ伏沈み長拐の穗のあから
ふる憂身を獨り喞ちつゝ責て名殘に今一言と延上り差覗けバ小助も偵が今生の御別と
振廻り見送り見かへる主從が心の闇に迷ひつゝ後へ牽るゝ縛索立ち佇まれい追立られ

て行も返るも定め無き世の狀態ぞ哀れ果敢無き次第あり恁てお清い涙々も小助が厚き
親切を無にいあさじと心を勵し乱し身姿も取裝らとず我家を指しく急ぐ那方の杜影よ
り待設けたる磯八い顯れ出てお清を呼留免先刻危ふき裁許の折柄我身が出て保証せし
ゆゑ御身い既よ免れ難き罪を遁れて再生の欣喜さこそと察せられぬ付ていヤべき一儀
あり汗い外ならず之見給へと懷よゆ取出す一通をお清い手に把り倩々見て打驚くを然
もこそと磯八い仕濟顏よ猶摺寄り之にも悉しく記せし通り御身が豫て夫と賴を操を守
る源之助い永の旅路の末遂に去る九月中旬頃肥後の沖にて颶風に出遇ひ人も船も覆沒
して氷の藻屑と成し折所持せし彼の手荷物が佐賀關へ漂流付しと彼地の村正等が中を
改め取調べし末當地の住人あるを知り我主家い此所の村長あれバいち早く則ち斯い知
らせ起せし書狀あり亦宵之のみならず御身が拘留せられし翌日跡ゐ殘りし舅御い痛く
其事を悲き世を形あくや覺しけん病苦を忍びて何處へ影も留めずゐられしい大
方入水とひとの風評されバ御身い徒らに今更誰が爲にか操を守り又誰とか孝を盡さる

べき假命ハ梢を離れし猿猴便べ汀に楫折船の漂流如き薄命を近頃我家へ戻られし若旦那幸三郎が深く憫然に覺されて恨と報ふに德を以てする世に有難き慈善より只管御身を助けまほしく種々と心を勞され今日しも危ふき裁決の折を我身に言解せ救ひ申せし事あれハ疾行て禮を陳べ永く御恩を報ひ玉ひね去來とて無理に手と

携へ誘ひ行んと勸むるをお清い取れし手を振拂ひものをも言ず一散ゐ我屋を指して走り行く跡を慕ふて磯八も同じく彼方へ馳來りお清が家へ入るを見て何か心に點頭つ裏手へ廻り木蔭に隱れ窃に樣子を覗ひ居る内にハお清が入ると齊しく働と倒れて暫らくハ人心地も付ざりしが漸々に起揚り其處此處隈なく打眺め爰ゑ始めて今聞し磯八が語の虛あらぬことを稍悟りけん只管に身の薄命と嘆息あし生て何をか樂しまんと思ひ諦め心を決し癒て嗜む懷刀を取出し口に稱名稱へつゝ今鳴る初更の鐘を名殘ゑ扳放したる一刀を我と我喉笛深く裏かくまでゑ刺貫かんとせし折しもあれ裏手に忍びし磯八ハ慌たゝしく躍り入り矢庭に懷刀奪取つてものをも言ずお清を小脇に搔懷き表の方へ出んとする爰にも前より忍びし涙人出遲かしらに磯八の小脇とつて捻倒しお清を勞り内に入る跡に續いて

旅装の老人同じく彼方へ入來るこれハ是誰あらんか前回辻堂に邂逅せし政次小平の兩人が今此所へ着せしより扨是より互迭りゑ各々過越し方を說出す其趣きハ重複になる事のみ多ければ略して爰に洩しぬ恁てお清ハ漸々と我身に罹る疑念晴れ夫が死せず世にあることを聞く悅びゑ引換て痛ましきハ舅ゑありと言出てハ泣き泣てハ卽つ孝貞全たき節婦の言葉に政次小平も慰め兼ね打凋るゝのみ詮方りきて三人寥しく思ひすも吐息吻々嘆息そる折柄表ゑ聲あつて父上のゑ身氣遣ひなしと言ひつゝ入來る其人を誰あらんと仰ぎ見れハ這ハ开も如何に絶て久しき源之助が身裝も變る立派の打扮故郷に飾る錦木の色も榮ある此再會弓手ゑ捉へし曲者を斗筋打し投出しつゝ靜々入來る此方にハお清が透さを駈寄りて彼曲者の襟髮捉へ引搾ながら面を合し打驚くこと大方あらず此奴ハ先頃父上へ重き手疵を負したる强賊に相違なしと聞より小平も立寄つて供ゑ組伏せ動かさず時に源之助ハ人々に打向ひ此場の樣子ハ前刻より表ゑあつて粗知れり偖父上の事又我身の上をも說聞せんとやそら中央ゑ座を占つ先頃肥州の沖に於て難船あしたる其折柄危ふき命を小平の爲めに救れし事ハ已ゑ彼より聞つらん夫より豫て志ざす鹿兒島へ至りしに艱難遂ゑ雲雨を得るの時到り彼地に在す英傑の士の進めにより這度慮ずも登庸され九重の庭ゑ召るゝ身の面目日頃の情願叶ひしかハ疾此事を親人に告ばやとは思へども私あらぬ官府の命に忍あらずも鹿兒島より直に東京へ航く途中此近海にて風に遇ひ一夜碇泊の折柄窃かに上陸あして訪來りしハ過つる夜然もお清小助等が寃罪ゑ羅し翌日あれハ親人の嘆き大方あらず殊に病躰の身を獨り看護者もなき茅屋に殘し參らせんハさぞがあれハ兎も角もして本船ゑで誘ひ申し夫より廣島の我知已某氏方へ依賴あし篤と保養をいたさせんと家來と差遣へ遣したれハ是にハ聊か氣遣ひあけれど如何せん是等の由を申置んに深夜と言ひ殊に時間に限ある官船の碇泊あれハ一刻も猶豫あらざるより忍あらずも其儘當地を出帆あしさて東京に至り首尾よく恩命を拜し廣島の軍營へ在勤の身とありしゆゑ直ゑ彼處へ赴任あし父上の安否を問其恙あきを知り猶手當と充分あしおき當地の事も氣遣ひあれハ又直に氣船ゑて只今此所

へ着せしまゝ急ぎ來懸る此屋の表に内を覗ふ曲者あり不審と暫し立佇み樣子を見るうち慮らずも政次お清小平等が物語りの一伍一什を詳細に聞き感激交々心腸を斷つ思ひありけさて彼曲者ハ要こそあらめと召捕たれば嚴しく訊問いたし見よと始め終りと詳らかに聞より三人の喜びハ何に譬へん言葉も無く盲木の浮木有曇華の春お花さく心地して手の舞ひ足の踏處を忘るゝまでの欽喜あるべし時に政次ハ今源之助が捕來りし彼曲者と面と合せど是あん發に佐川幸三と名乘り不其事を慫慂せし非道無慙の惡漢なれバ左もころと思ひつゝ嚴しく訊問なせし處遂に包難く遂一白狀に及びたり又手代磯八も主を助くる桀の犬よからぬ事の種々あるを同じく白狀なしたりける扨柄政次ハ容を改め懷より取出す書類ハ發に山中にて拾ひし森家の要書あれば之を源之助に返しさて清潔よく川西と殺せし事を自首あして一時も早く小助を救ひ出さんと二人の賊を縛め引連れ早御別れと立揚り暇乞して出て行く逢ふを別れの哀別離苦憂喜交々定め無き世ハ實に一炊の夢なりと悟れど偵が兄弟の情誼に引るゝ殺髮お清小平も供侶に暫しと留むる袖打拂ひ二人を追立て行空も曉天近く横雲の闇死よりしく明につく政次が自首こそ殊勝なりけり扨是より法庭に於て審理の末忽地善惡判然し小助ハ無罪放免となり政次ハ人を殺せし大罪あれど素謀殺あらざれば寛典の御沙汰とあり又二人の曲者ハ此他にも種々の犯罪ありて遂ゑ首足處を異ゑせしとなり是ハあれ後の咄しあれど其大要を摘て爰に掲く偖又源之助ハお清幷びに小助親子と伴ひ其任所に趣き永年の憂苦を慰め共々父に孝養を盡し居るうちお清ハ二人まで小兒を舉け又小助ハ某官に登庸され是彼共に目出度榮ゑ榮ふ樂しみも曾是其始免憂苦に忍びし餘慶にて竹の操の色かへぬその一節を書續し世ゑも稀ある貞烈美譚嗚呼がましき事お乍ら婦幼の敎草ともなりお編者が此上ある僥倖にころ

貞烈美譚　操の一節　終

明治十六年五月廿三日御届
仝　年六月二日出版

編輯人　東京日本橋區通二丁目九番地　三品長三郎

出版人　同區樽正町五番地　塚原房吉

發賣元　同　京橋區銀坐貳丁目　愛善社

芳譚雜誌假本局

（定價金拾八錢）

賣捌所

東京日本橋通三丁目　丸屋鉄次郎
同　神田雉子町　巖々堂
同　元大坂町　法木徳兵衛堂
同　南傳馬町　蔦屋吉藏
同　木挽町　萬字堂
同　室町三丁目　滑稽堂
同　飯田町二丁目　武田平治
同　長谷川町　具足屋熊次郎
同　大傳馬町三丁目　伊勢屋戊兵衛
同　芝宇田川町　大橋吉五郎
横濱太田町
大坂備後町　伊勢屋梅藏
駿州靜岡江川町　岡島眞七
信州臼田　杉本平七
同　小諸町　依田儀三郎
阿州徳島　小山九良兵衛
仙臺大町　阪井萬吉
陸前弘前本町　木村文助
陸中石ノ卷　武田莊七
相州小田原絲町　三陸屋利兵衛
石壽堂喜右衛門

發兌書目

柳亭種彦著
續正本製
楓時故郷の錦木
定價　金十五錢

右ハ初代種彦先生の名作にて數篇の物語と演劇の体裁に書著したる正本製に倣ひ上野戰爭後日物語を世話狂言の如くに新作せし面白き繪入の小冊子なれバ各書林繪双紙店に就て御購覽の程奉願ひ

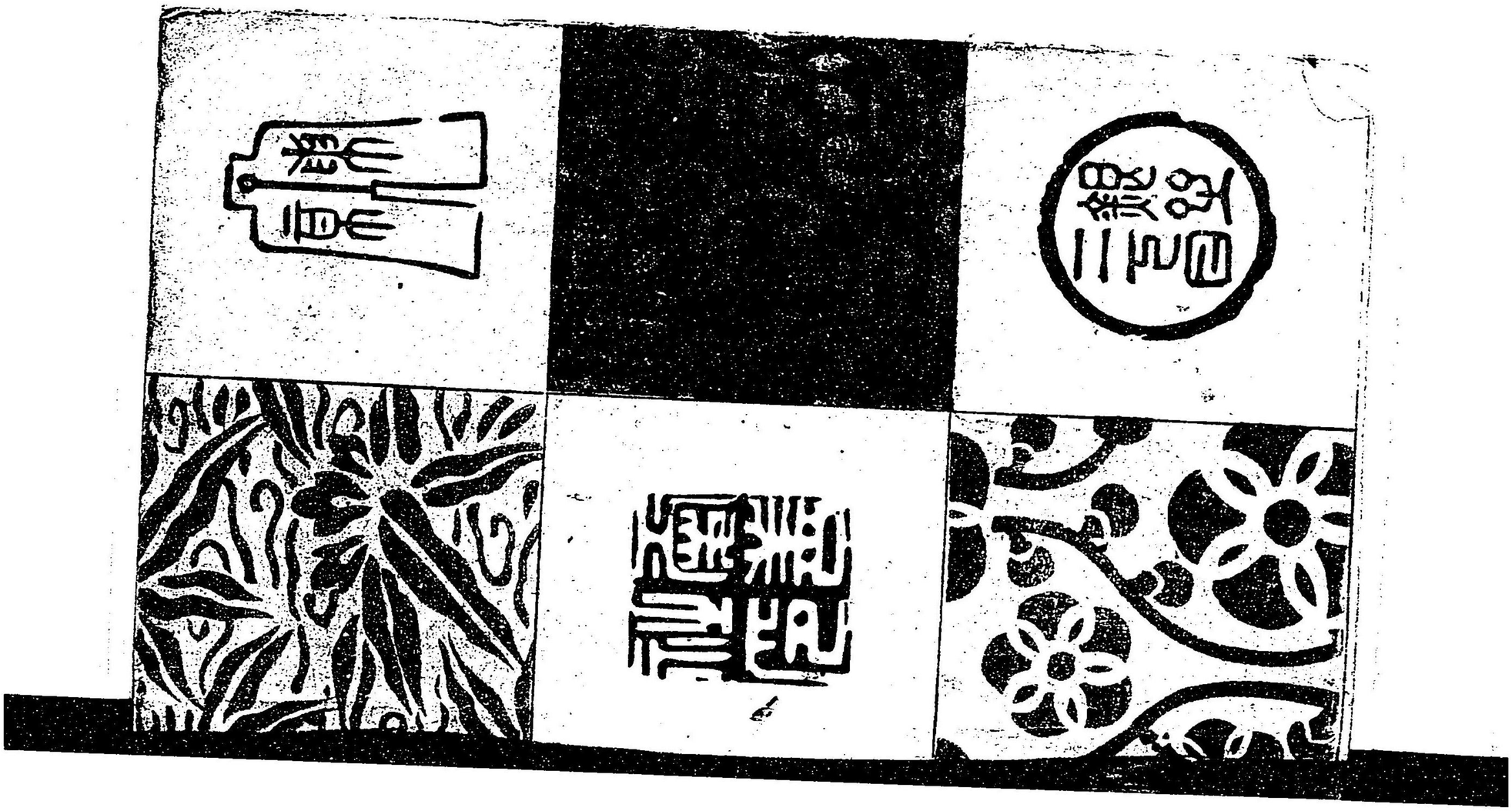
柳亭種彦著。外題芳年畫
梅柳春雨譚
前編後編續切
定價金貳拾錢

右ハ貞婦お柳が善行と淫婦お梅が醜行を併せて勸善懲惡の道理を正したる面白き話にて挿繪の精工たる世間にありふれたる草双紙とハ別種の美本なり

柳亭種彦編輯。朝霞樓芳幾畫
落花清風
慶應水滸傳
全二冊
定價廿五錢

右ハ近世有名の俠客新門辰五郎小金井小二郎等が事跡に付て弱を扶け剛と挫く愉快の為拵を蒐め至極面白繪入の美本なり

芳譚雜誌
毎土曜日發兌
定價金五錢

右ハ孝子節婦忠臣義僕等の美事善行を揭細密なる挿繪を加へ婦童方にも分易く且教育にも成べき雜誌にて毎土曜日發兌仕候間御愛看を冀ふ

芳譚雜誌合本
西洋綴美本
自第一集至第七集　各定價金八十錢
自第八集至第十三集　同定價金壹圓